

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和49年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001202

昭和 49 年度

国立国語研究所年報

— 26 —

国立国語研究所

1 9 7 5

刊行のことば

本書は、昭和49年度における研究および事業の経過について述べたものである。

49年度に刊行したものは次のとおりである。

電子計算機による国語研究（Ⅶ）（報告54）

幼児語の形態論的な分析（報告55）

国立国語研究所年報—25—（昭和48年度）

国語年鑑（昭和49年版）

日本語と日本語教育（日本語教育教材—文化庁と共編）

昭和50年6月

国立国語研究所長

岩 淵 悦 太 郎

目 次

刊行のことば

昭和49年度の調査研究のあらまし	1
現代語文法の記述的研究	7
語彙論上の諸問題に関する調査・研究	9
所属集団の差異による言語行動の比較研究	10
現代語の比喩表現の研究	11
各地方言親族語彙の言語社会学的研究	13
発音過程に関する研究	15
図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究	17
日本言語地図の検証調査	18
「各地方言資料の収集および文字化」のための研究	20
地域社会における言語使用の変遷と変容の研究	23
明治初期における漢語の研究	25
幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究	34
現代児童・生徒の言語能力の動態調査	38
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	63
漱石・鷗外の用語の研究	66
新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究	68
高校教科書の用語調査	72
日本語教育のための内容と方法に関する基礎的研究	74
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	76
科学研究費補助金による研究	84
日本語教育に関する事業	89
図書の収集と整理	93
庶務報告	94

昭和49年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次のとおりである。

- | | |
|---------------------------------|--------------|
| (1) 現代語文法の記述的研究 | 言語体系研究部第一研究室 |
| (2) 語彙論上の諸問題に関する調査・研究 | 〃 第二研究室 |
| (3) 所属集団の差異による言語行動の比較研究 | 言語行動研究部第一研究室 |
| (4) 現代語の比喩表現の研究 | 〃 第一研究室 |
| (5) 各地方言親族語彙の言語社会学的研究 | 〃 第二研究室 |
| (6) 発音過程に関する研究 | 〃 第三研究室 |
| (7) 図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究 | 〃 第三研究室 |
| (8) 日本言語地図の検証調査 | 言語変化研究部第一研究室 |
| (9) 「各地方言資料の収集および文字化」のための研究 | 〃 第一研究室 |
| (10) 地域社会における言語使用の変遷と変容の研究 | 〃 第一研究室 |
| (11) 明治初期における漢語の研究 | 〃 第二研究室 |
| (12) 幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究 | 言語教育研究部第一研究室 |
| (13) 現代児童・生徒の言語能力の動態調査 | 〃 第一研究室 |
| (14) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 | 言語計量研究部第一研究室 |
| (15) 漱石・鷗外の用語の研究 | 〃 第一研究室 |
| (16) 新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究 | 〃 第二研究室 |
| (17) 高校教科書の用語調査 | 〃 第三研究室 |
| (18) 日本語教育のための内容と方法に関する基礎的研究 | |

日本語教育研究部日本語教育研究室

(19) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理

- (1) 現代語文法の記述的研究……現代日本語文法の体系的な記述を目的とする。当研究室は本年度の機構改組によって設置されたものであり、本年度は、今後の研究のために、文法に関する文献カードの作成と整理をすすめながら、研究計画を検討し、当面の目標として、動詞の形態論的な分析と副詞の用法の分析をあわせ行うこととし、資料の収集をはじめた。
- (2) 語彙論上の諸問題に関する調査・研究……現代語彙の全体像を計量的・歴史的・対照的にとらえるために、辞典の見出し語など、基本的語彙資料をあつめて比較することに着手した。ほかに「現代雑誌90種における語表記の調査」「同義語についての調査」も進めた。
- (3) 所属集団の差異による言語行動の比較研究……昭和47年度に岡崎市で行った調査の整理、集計を行うとともに、昭和48年度に鶴岡市で行った追加調査資料を整理した。
- (4) 現代語の比喩表現の研究……言語形式と比喩的転換の性格とを規準として比喩表現の分類・再整理をはかる試みの収束段階として、結合比喩・文脈比喩の部分の整理を継続・終了し、報告書『比喩の研究』の原稿を執筆した。
- (5) 各地方言親族語彙の言語社会的学研究……全国各地の方言集・方言辞典・民俗誌・村落調査報告書その他の文献から方言の親族語とその意味用法に関する記述の部分を転写採集し、分類整理した。また、青森県東津軽郡蟹田町・山口県阿武郡川上村・香川県三豊郡高瀬町・徳島県三好郡西祖谷山村の4地点で臨地調査した。
- (6) 発音過程に関する研究……前年度に引き続き、日本語の種々の音声を発音する時の音声器官の運動のX線映画フィルムによる分析を行ったが、分析結果の精度を高めるためにダイナミック・パルトグラムおよび唇の高速度映画により新たに発音行動を記録し、補助資料とした。
- (7) 図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究……前年

度にひきつづき、眼球運動の測定装置，文字系列の提示装置などを整え，これを用いて，読書中の眼球運動一停留時の情報収集範囲に関する実験を実施した。

- (8) 日本言語地図の検証調査……言語地図に盛られている言語資料の性格を明らかにするための調査である。従来からいろいろの調査を行ってきたが，昭和50年度にいちおう完結し，分析・整理にはいる予定である。
- (9) 「各地方言資料の収集および文字化」のための研究……失われつつある方言を，現時点で録音・文字化し，国語研究の基本的資料としようとする。本年度は，3か年計画の第1年次として，来年度・再来年度に実施する本研究の準備を行った。
- (10) 地域社会における言語使用の変遷と変容の研究……旧第四研究部第二資料研究室の調査の一部を継承するものである。福島県北部地域におけるアンケート調査について，集計・製表・製図等のまとめの作業を行った。
- (11) 明治初期における漢語の研究……明治初期の各種文献に現れた漢語の実態を明らかにするため，翻訳小説『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』（和文体）とについて語彙表を作成し，両作品に現れた漢語の分析を進めた。また，参考資料として同一訳者の『龍動新繁昌記』（明治11年）の用例カードを採集し，明治初期の東京日日新聞の用語用字調査を行い，漢語に関する著書・論文目録の作成，および，国立国語研究所蔵『明治期刊行辞書目録』を作成した。
- (12) 幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究……幼児・児童における母国語の習得過程，および言語の習得と幼児，児童の人間の諸能力の発達との関係を明らかにするため，初年度研究として，〈上・下・左・右・前・後〉などの空間関係語をとりあげ，それらの語の意味理解と認知発達に関する実験を行った。また，この研究の方法的基礎を得るため，幼児の言語および学習行動に関する室内観察と文献資料の整理展望を試みた。

なお，幼児の文構造の発達に関する調査（旧言語効果研究室で実施して

きた調査であるが、機構改組に伴い、改めて継続実施)については、結果の整理にあたった。

- (13) 現代児童、生徒の言語能力の動態調査……現代児童、生徒の言語能力の動態を、主として文章表現力、文章表現行動の面から明らかにするため、昭和46年度から実施してきたが、本年度はその補完調査と報告書作成のための諸資料の採点、集計を行った。
- (14) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究……用語検索システムを作成し、新聞語彙調査データをはじめ、各種の入力データについて、単語単位、文節単位、さらにはセンテンス単位の、多様な検索結果を得て、言語情報処理の基礎的な研究を行うことを目指している。また、日本語データの性格を把握するため、文字連続の統計的調査や、語句の連接形態の研究を進めている。
- (15) 漱石・鷗外の用語の研究……電子計算機によって、漱石・鷗外の作品の索引を作成するとともに、その用語の分析を行うもので、『三四郎』『高瀬舟』『寒山拾得』『硝子戸の中』『行人』『雁』『山椒大夫』『青年』の索引ファイル（磁気テープ）が完成した。また、これらのかたかな索引または漢字かな交り索引を打ち出した。なお、現在『坊っちゃん』『草枕』『渋江抽斎』『こころ』の四作品について作業が進められている。
- (16) 新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究……新聞語彙調査の漢字表記の実態を明らかにするため、漢字表台帳を作成しカードで電子計算機に再入力し、各種の漢字表を作成し、分析を行い、報告書原稿の執筆を進めた。また、語表記に関しては、仮名書き・まぜ書き表記等の集計を行い、後者について分析した。
- (17) 高校教科書の用語調査……本年度が初年度であり、調査対象の選定、調査項目の決定、単位等調査方法の決定、人手および機械利用のトータルシステムの検討と決定を行い、調査の作業を開始した。
- (18) 日本語教育のための内容と方法に関する基礎的研究……研究を推進するための基礎的資料を収集することを目的として、既存の各種研究成果を文

献カードに採録する仕事を始めた。また、国内の各日本語教育機関を訪問し現状についての実態および問題点を調査した。

- (19) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理……例年のとおり新聞雑誌・単行本について調査し、『国語年鑑』の資料として整理した。

なお、上記の研究のほか、文部省科学研究費補助金の交付を受けて、以下の研究を行った。

総合研究（A）大都市における言語生活の実態調査（代表 野元菊雄）…
…大都市住民の言語生活の実態を知るために、今年度は東京および大阪において、一般市民をサンプリングにより、東京で1,000人、大阪で500人調査した。調査内容は、社会生活や言語生活についてのアンケート方式による自記式回答と、面接調査による言語のいろいろな面の聞きとりとである。結果は今集計中である。

一般研究（B）作品の用語検索組織の研究（代表 石綿敏雄）……言語研究にコンピュータを有効に使用するため、類義語表等各種語彙表作成システムの開発、情報付加、更新、異形式（フォーマット）データを含む取扱いシステム（データ・ベース）の開発を目的としてその方法を検討し、材料として鷗外『青年』、美妙『武蔵野』、逍遙『当世書生氣質』（一部）の索引を試作した。

一般研究（C）現代の国語表記におよぼした洋学・漢学の影響……（代表 斎賀秀夫）現代日本語の表記法は、江戸時代から明治時代にかけて、西洋文化の影響と、中国文化の影響をうけて成立した。その成立過程を明らかにするため、福井大学・山形大学・鹿児島大学の学生の協力をえて、福井県立大野高校図書館の大野藩旧蔵本、市立米沢図書館の興譲館文庫、鹿児島大学付属図書館の玉里文庫を調査した。

本年度から従来の研究組織を改めた。次のとおりである。（昭和49年4月11日現在）

- ◇言語体系研究部 部長 西尾 寅弥
- 第一研究室 高橋 太郎 (室長) 工藤 浩
- 第二研究室 宮島 達夫 (室長) 村木新次郎
- ◇言語行動研究部 部長 野元 菊雄
- 第一研究室 本堂 寛 (室長) 中村 明 江川 清
- 第二研究室 渡辺 友左 (室長)
- 第三研究室 野元 菊雄 (室長) 上村 幸雄 (外国出張中)
- 高田 正治 神部 尙武
- ◇言語変化研究部 部長 飯豊 毅一
- 第一研究室 徳川 宗賢 (室長) 佐藤 亮一
- 第二研究室 飛田 良文 (室長) 梶原滉太郎
- ◇言語教育研究部 部長 芦沢 節
- 第一研究室 村石 昭三 (室長) 大久保 愛 岩田 純一
- ◇言語計量研究部 部長 齋賀 秀夫
- 第一研究室 齋賀 秀夫 (室長) 田中 章夫 (外国出張中)
- 中野 洋 齋岡 昭夫
- 第二研究室 土屋 信一 (室長) 野村 雅昭
- 第三研究室 石綿 敏雄 (室長) 齋藤 秀紀 米田 正人
- ◇日本語教育研究部部長 林 大
- 日本語教育研究室 水谷 修 (室長) 高田 誠
- 日本語教育研修室 武田 祈 (室長)

現代語文法の記述的研究

A 目的と内容

現代日本語文法の体系的な記述を目的とする。当研究室は本年度の改組の結果設置されたものであり、本年度は、今後の研究のための問題の設定と文献の整理を目標として、つぎの三つのしごとを行なった。

- a) 文法に関する研究文献カードの作成と文献の収集
- b) 文法研究のための言語資料の収集
- c) 『幼児語の形態論的な分析——動詞・形容詞・述語名詞』の刊行。

B 担当者

この研究は、言語体系研究部第一研究室がおこなった。aは室員の工藤浩が、bは工藤と室長の高橋太郎が担当した。cは、前年度までの「言語の表現機能と伝達効果の研究」のしめくりであり、それをすすめてきた旧言語効果研究室より当研究室にうつった室長の高橋と研究補助員の鈴木がこれを担当した。

C 本年度のしごと

- (1) aでは、国語年鑑に採録された文法に関する雑誌論文の目録のカードを作成し、内容別ならびに著者別の分類をおわった。また、その一部について、コピーをとった。
- (2) bでは、高橋は動詞、工藤は副詞の用例カードをそれぞれ「動詞・形容詞等の意味・用法の記述的研究」のために作製したカード（年報16・17を参照）の残りから採集して、適宜分析し、次年度からの研究計画を検討した。
- (3) cでは、『国立国語研究所報告55』として標記の報告書を刊行したほ

か，研究室において「幼児語の連語論的な分析——名詞の格の用法——」を作成した。なお，この分析は，以後の記述的研究の方法の検討をかねておこなった。

D 今後の予定

動詞の諸形式とその用法，および，副詞の用法の記述を当面の課題として研究をすすめる。

(高橋)

語彙論上の諸問題に関する調査・研究

A 目 的

現代語彙の全体像を計量的、歴史的、あるいは対照的にとらえる「現代語彙の概観的調査」をおもな目的とする。

B 担 当 者

言語体系研究部第2研究室の宮島達夫・高木翠が担当した。

C 本年度の作業

ジャパン・タイムズ社編『六カ国語辞典』の見出し語（約1万語）に『分類語彙表』の分類番号と阪本一郎『教育基本語彙』の段階・重要度符号をつけ、これを電子計算機に記憶させるよう、パンチした。

なお、このほか、現代雑誌90種の語彙調査のカードにより、漢語表記のゆれをしらべた。（担当：宮島達夫・高木翠）また、同義語について、昭和48・49年度に調査した結果の集計、分析をすすめた。（担当：西尾寅弥）

D 今後の予定

基本的な語彙資料の比較、対照をさらにすすめるとともに、これを国語辞典・和英辞典などとくらべて、その歴史的な位置づけを明らかにする予定である。

（宮島）

所属集団の差異による言語行動の比較研究

A 目 的

人々の言語生活は性、年齢、階層、居住経歴などを始めとし、彼らがおかれている社会的文化的諸状況と密接な関係をもっている。この関係を明らかにするために社会言語学的な視点からの調査研究を行っている。

B 担 当 者

言語行動研究部長の野元菊雄，言語行動研究部第一研究室の本堂寛（室長，49. 8. 16 岩手大学に転出）・江川清・林実知代，言語変化研究部第二研究室の堀江よし子が共同して当たった。

C 本年度の研究

昭和46，47年度に文部省科学研究費試験研究(1)（「社会変化と言語生活の変容」代表者 岩淵悦太郎）を受けて調査を実施した。このうち，46年度実施の山形県鶴岡市での共通語化の調査（概要は『年報23』参照）の全般的な報告書は前年度に刊行した。そこで本年度から，昭和47年度実施の愛知県岡崎市での敬語使用の調査（概要は『年報24』参照）の整理・集計にかかった。

また，前年度に行った鶴岡市での追加調査の整理に取り組んだ。

D 今後の予定

50年度以降も，社会言語学的な調査研究を継続して実施するとともに，できるだけ早い時期に上記の岡崎市での調査をまとめ刊行したい。

（江川）

現代語の比喩表現の研究

A 目 的

修辞学における比喩表現の分類は、その観点が多元的なためもあって、条件がじゅうぶんに排他的でなく、分類結果に網羅性・系統性がとぼしい欠点がある。そこで、文学作品を資料とした実例の分析をとおして、言語表現形式と比喩的転換の性格とを規準とした分類・再整理を試みるものである。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室の中村明が企画・立案・実施し、同室の林実知代がその整理の一部をうけもった。

C 本年度の成果

- 1) 結合比喩の分類・整理を継続し終了した。
- 2) 文脈比喩の分類・整理を継続し終了した。
- 3) 報告書『比喩の研究』を執筆し、索引の一部をのぞいて終了した。その概要はつぎのとおりである。

序章 比喩研究の課題

第1部 比喩論

第1編 比喩に関する基礎的考察

第1章 比喩の基本的性格

第2章 比喩法の種類

第3章 比喩性の段階

第2編 比喩研究の諸問題

第4章 比喩的転換の諸相

第5章 比喩効果の分析

第3編 比喩における思考と表現

第6章 言語形式と比喩的対比

第7章 比喩の成立と言語的条件

第2部 比喩表現の分類

1 総説

2 分類方法

3 分類結果

3.1 指標比喩

3.2 結合比喩

3.3 文脈比喩

4 表

5 索引

終章 比喩研究の展望

<付> 比喩関係文献リスト

D 今後の予定

- 1) 比喩索引を作成し、報告書原稿を完成する。
- 2) 報告書『比喩の研究』を刊行する。

(中村)

各地方言親族語彙の言語社会学的研究

A 目的・意義

次の目的のもとに、わが国各地方言の親族語彙の収集と記述的研究を進める。

(1) 日本語の親族語彙に関する全国方言辞典または資料集を編集刊行する。

(2) 日本語の方言の親族語彙は、語彙としてどのような構造をもっているか。親族組織上の特定の項目（・意味）を表わす単語にどのようなものがあり、それらは全国的にどのような分布を示しているか。個々の親族語は、単語としてどのような意味や用法の構造をもっているか、などの言語的事実を明らかにする。さらに、これらの言語事実が親族組織を含む日本の伝統的な社会構造や文化とどのようにかかわり合う側面があるのかを明らかにする。

B 担当者

言語行動第二研究室の渡辺友左が担当し、角田令子（49. 12. 31 退職）が作業を助けた。

C 本年度の経過

この研究は、旧第二資料研究室が昭和40年度からとりくんできた研究課題「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」で渡辺が分担した課題の一部を発展させたものである。4年計画で、本年度はその第2年次にあたる。

本年度は、前年度にひきつづいて、次の二つの調査研究を平行して実施した。

(1) 臨地調査——東北・関東・甲信・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州・沖縄の10ブロックについて、4年間に、各1～2地点、全体で15地点程

度の臨地調査をすることを目標に、本年度は次の4地点の調査をした。

青森県東津軽郡蟹田町 山口県阿武郡川上村
香川県三豊郡高瀬町 徳島県三好郡西祖谷山村

(2) 文献調査——全国各地の方言集・方言辞典・民俗誌・村落調査報告書その他の文献から方言の親族語とその意味用法に関する記述の部分をカードに逐一転写した。約5千枚。前年度までに収集したカード約1万7千枚と合わせて、その分類整理にあたった。

D 今後の予定

臨地調査は、次年度以降も継続して実施していく予定である。文献調査は、カード採集の作業は一応今年度で打ち切り、次年度以降はもっぱら本年度までに採集したカードと「東条カード」を分類整理し、意味項目別の方言親族語彙台帳を逐次作成していくことを予定している。

(渡辺)

発音過程に関する研究

A 目 的

現代日本語の音声の、音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴などを調音的、音響的、機能的な側面から明らかにすることを目的とする。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声または、聴覚障害者、言語障害者の音声も対象とすることがありうる。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室の高田正治が担当した。

C 本年度の研究

主として前年度から引き続いてX線像による調音運動の研究を続け、標準語の個々の単音を発する際のX線映画フィルム像のトレースと計測とを行ったが、分析精度を高めるため、新たにダイナミック・パラトグラムおよび唇の高速度映画により発音行動の記録をとり参考資料とした。これらの研究の成果に関しては、次のような発表を行った。

高田正治・岩淵悦太郎「日本語母音の調音過程のX線映画による観測——日本語の母音の発音における舌のうごき——」（日本音響学会 音声研究委員会 資料番号S74—75 1975. 3. 22 東京大学医学部）

有泉 均・高田 正治「あごと舌の運動の相互関係——（口頭）」（シンポジウム「言語の視覚的表示の実用化について」 1975. 3. 7 東北大学医学部）

宮脇邦子・桐谷滋・比企静雄・白井真智子・上村幸雄・高田正治「日本語における

舌と口蓋の接触パターン——ダイナミックパルトグラフィによる観察——」（1975. 3. 国立聴力言語障害センター発行）

D 今後の予定

次年度は、現代の標準的な日本語の音節の発話時における声道各部（唇，下あご，舌，口蓋垂など）の動きについての時系列分析を行う予定である。

（高田）

図形・文字の視覚情報処理過程および読書 過程に関する研究

A 目 的

図形および文字が、感覚伝送系での情報処理、および大脳における神経系の活動の結果として知覚される過程について視覚心理学的立場から実験研究を行う。これにあわせて、読書過程に関する実験研究を行う。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室の神部尙武が担当した。

C 本年度の経過と今後の予定

本年度は、読書中の眼球運動の測定装置、一定時間だけ文字系列を提示する装置などの実験研究に必要な機器を整えた。

眼球電位法によって眼球運動を記録する装置を用いて、読書中の眼球運動一停留時における情報収集範囲を定める実験の一部を実施した。このほかに、一定時間だけ文字系列を提示できる装置がほぼ完成したので、これを用いて漢字二字からなる単語の知覚過程を調べる実験が進行中である。

次年度は、さききのべた実験装置をさらに改良し、眼球運動、認知に必要な文字系列の提示時間などを手がかりに、文字の知覚に関する基礎的な実験的検討を進めていく予定である。

(神部)

日本言語地図の検証調査

A 目 的

『日本言語地図』の完成をみて、地図に盛られている言語資料の性格を明らかにするための、検証調査を行う。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室の徳川宗賢（室長）・佐藤亮一が共同してあたり、白沢宏枝が協力した。調査実施に際しては、言語行動研究部第一研究室の江川清が参加した。

C 本年度の研究

従来を検証調査については、『年報17』以下にその概要を記述した。

本年度は、昭和46年度に、熊本県八代市と人吉市を結ぶ地域で行った調査（『年報23』参照）の第2次調査を実施した。目標は、各地点における、もっともくだけた表現からもっともあらたまった表現にいたる各段階の表現が、それぞれどのような地域差を持ちながら、多層的に存在・交錯しているかを明らかにするところにある。前回の第1次調査と今回の第2次調査の違いは、まず、調査項目について、前回は単語を中心としていたのに対して、今回は依頼・勧誘などの文表現を中心としていること、つぎに、調査地点と被調査者について、前回は球磨川沿いの約60か所のほぼ全集落で各1名の被調査者を選んだのに対して、今回は地点は12か所にしぼるかわりに各平均5名の被調査者を選んだことである。1か所の被調査者数を複数にした理由は、この種の調査に個人差がどのようにかわるかを見ようとしたためである。

調査は、昭和50年3月に行った。なお、この調査の準備調査は、昭和48年3月に実施した（『年報24』参照）。

D 今後の予定

この調査は来年度をもっていちおう打ち切り、各調査の詳しい内容および結果については、機会を改めて報告する。

(徳川・佐藤)

「各地方言資料の収集および文字化」 のための研究

A 目 的

急速に変化し失われつつある方言を、現時点で録音・文字化（標準語訳・脚注つき）し、定本として永久に保存し、国語研究の基本的資料とする。

B 担 当 者

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室が、地方研究員間の連絡にあたりつつ運営する。

昭和49年度の地方研究員は、次の各氏に委嘱した。

担当地域	氏 名	所属機関<職>
北海道	五十嵐三郎	札幌大学<教授>
青 森	松本 宙	弘前学院大学<助教授>
岩 手	小松代融一	岩手医科大学<教授>
宮 城	加藤 正信	東北大学文学部<助教授>
秋 田	北条 忠雄	秋田大学教育学部<教授>
山 形	矢作 春樹	市立陵南中学校<教諭>
福 島	三浦 芳夫	安積商業高等学校<講師>
茨 城	金沢 直人	茨城大学教育学部<教授>
栃 木	大橋 勝男	新潟大学教育学部<助教授>
群 馬	上野 勇	県立高崎工業高等学校<教諭>
埼 玉	井上 史雄	東京大学文学部<助手>
千 葉	加藤 信昭	千葉大学教育学部<助教授>
東 京	大島 一郎	東京都立大学人文学部<助教授>
神奈川	齋藤義七郎	
新 潟	剣持隼一郎	国立長岡工業高等専門学校<講師>
富 山	川本栄一郎	金沢大学教育学部<助教授>

石川	岩井 隆盛	金沢大学法文学部<教授>
福井	佐藤 茂	福井大学教育学部<教授>
山梨	清水 茂夫	山梨大学<教授>
長野	馬瀬 良雄	信州大学人文学部<教授>
岐阜	谷開 石雄	県立岐阜北高等学校<教諭>
静岡	日野 資純	静岡大学人文学部<教授>
愛知	山口 幸洋	
三重	広浜 文雄	天理大学<教授>
滋賀	笈 大城	県立虎姫高等学校<教諭>
京都	佐藤 虎男	大阪教育大学<助教授>
大阪	山本 俊治	武庫川女子大学文学部<教授>
兵庫	和田 実	神戸大学教養部<教授>
奈良	後藤 和彦	奈良女子大学<助教授>
和歌山	村内 英一	和歌山大学教育学部<教授>
鳥取	室山 敏昭	鳥取大学教育学部<助教授>
島根	広戸 惇	京都家政短期大学<教授>
岡山	虫明吉治郎	県立玉野高等学校<教頭>
広島	今石 元久	広島女学院大学文学部<講師>
山口	岡野 信子	梅光女学院大学<助教授>
徳島	遠藤 潤一	徳島大学教育学部<講師>
香川	玉井 節子	市立坂出中学校<教諭>
愛媛	杉山 正世	
高知	土居 重俊	四国女子大学<教授>
福岡	奥村 三雄	九州大学文学部<助教授>
佐賀	神部 宏泰	佐賀大学教育学部<助教授>
長崎	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部<教授>
熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部<教授>
大分	種 友明	大分大学教育学部<助教授>
宮崎	日高貢一郎	東京都立大学大学院<学生>

鹿児島 田尻 英三 鹿児島大学教育学部<講師>
沖 縄 加治工真市 県立沖縄工業高等学校<教諭>

C 本年度の計画

この研究は3か年計画とし、本年度はその準備、来年度・再来年度に本研究を行うこととした。

本年度の準備計画としては、地方研究員に対して

1. 実験的録音、その文字化、注釈・脚注つけ
2. 実験的録音にもとづく来年度以降の計画についてのレポート
3. 別計画で行われた同種の計画についての情報

を求めた。

別に、研究室員としても、昭和49年11月から12月にかけて沖縄地方（主として八重山）、昭和50年2月に山形地方（主として山形市周辺）において実験的録音を行った。

以上の結果にもとづいて、昭和50年3月8日に、臨時の地方研究員懇談会を開催し、本年度以降の計画を論じた。参加地方研究員は、加藤正信<宮城>、矢作春樹<山形>、斎藤義七郎<神奈川>、剣持隼一郎<新潟>、佐藤茂<福井>、馬瀬良雄<長野>、日野資純<静岡>、山口幸洋<愛知>、広浜文雄<三重>、佐藤虎男<京都>、後藤和彦<奈良>、広戸惇<島根>、岡野信子<山口>、土居重俊<高知>、日高貢一郎<宮崎>、加治工真市<沖縄>の16名であった。この懇談会には、別に次年度以降に参加予定の本堂寛（岩手大学助教授・前所員）、真田信治（桐山女学園大学講師）が参加した。

D 今後の予定

この研究は、昭和51年度には完結する予定である。

（徳川）

地域社会における言語使用の変遷と変容の研究

A 目的・意義

社会生活の変動に応じて、地域社会における言語生活も大きく変動しつつある。共通語の普及が一般的傾向として認められるが、方言そのものにもかなりな変化が見られる。高年層と青年層との間には、もちろん、言語使用の面に大きな違いがあるし、場面による変容もいちじるしい。

この研究は社会構造の比較的単純な農村社会として福島県北部農村（伊達郡保原町地区・福島市飯坂町茂庭地区）を取り上げ、言語使用の変遷と変容の実態を明らかにしようとするものである。

B 担当者

もっばら飯豊毅一（言語変化研究部長）が担当した。

C これまでの経過

この研究は、旧第四研究部第二資料研究室における「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」の一部を継承するものである。この面における調査としては、昭和40年度～昭和46年度において次のようなことを行った。

- 1 音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙に関する調査
- 2 録音資料による実態調査
- 3 言語使用の意識に関する面接調査
- 4 言語使用の意識に関するアンケート調査
- 5 各種場面における言語使用の変容についての調査

このうち、1と3については昭和49年3月に国立国語研究所報告53『言語使用の変遷(1)——福島県北部地域の面接調査』を刊行した。

D 本年度の作業

本年度は4について、集計・整理をはじめ、まとめの作業を行った。

(飯豊)

明治初期における漢語の研究

A 目的・意義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化に伴い、日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく現れている。そこで、明治初期の各種文献に現れた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照する。さらに、大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語および漢字表記の変遷の条件と方向とを見きわめ現代語成立の歴史的背景を明らかにしようとする。

B 担当者

飛田良文（室長）・梶原滉太郎が共同して作業にあたったが、本年度の作業のうち、(1)～(4)は主に飛田が担当し、(5)は梶原が担当し、中山典子がこれを助けた。

C これまでの経過

言語変化研究部第二研究室（昭和48年度まで近代語研究室）では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行い、その成果については、そのつど年報または報告書に発表してきた（『年報』7～20および『明治初期の新聞の用語』〈報告15〉参照）。昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の総索引を作成し、48年度には『安愚楽編用語索引』（資料集9）を刊行した（年報21～25参照）。現在、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との調査を行っている。

D 本年度の作業

本年度は、次の作業を行った。

- (1) 『花柳春話』の語彙表作成と三字漢語の分析
- (2) 丹羽純一郎訳『龍動新繁昌記』(明治11年)の用例カードの採集
- (3) 漢語研究のための著書・論文目録の作成
- (4) 国立国語研究所蔵「明治期刊行辞書目録」の作成と印刷
- (5) 東京日日新聞の用語用字調査

その結果は、次のとおりである。

- (1) 『花柳春話』の語彙表作成と三字漢語の分析

本年度も前年度に引き続いて、語彙表作成の作業を継続し、ルビのない語の読み方を決める参考として、(2)の作業を行った。なお、三字漢語について文体の比較を試みたので報告する。

〔三字漢語の分析〕

『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』の三字漢語の語構成を比較すると、次のようになる。なお、^o印は両文体に共通の漢語構成要素、*印は両文体に共通の語を示す。用例中の；は人間関係とそれ以外との区別を示す。

＜『欧州奇事花柳春話』の三字漢語＞

〔並立関係〕

(I) ○+○+○ 2

上 上-中-下

英 英-佛-日

(II) 1 ○+○○ (名) 5

^o過 *過不及

幸 幸不幸

在 在不在

^o士 *士君子

打 打秋風

2 ○+○○ (動) 6

飲 飲-飲

咳 咳-咳

喫 喫-喫

歎 歎-歎

聽 聽-聽

讀 讀-讀

〔修飾関係〕

(I) ○+○○

1 数+○○ 94

一₁ 一惡漢，一丐兒，一魁首，
一佳耦，*一華族，一下婢，
一鰥婦，一議員，一貴族，
一愚漢，一豪傑，一豪雄，
一才子，一兒女，一士人，
一秀才，一巡查，一小兒，
一少女，一小兒，一少年，
一情郎，一女子，一女兒，
一書生，一親友，一賤夫，
一騷人，一村婦，一男子，
一男兒，一痴夫，一鄙女，
一美女，一美人，一鄙夫，
一婦人，一暴客，一密夫，
一野夫，一老人，一老婆，
一老夫；
一会社，一雅地，一鬧境，
一奇事，一驕亭，一客舍，
一巨屋，一國法，一社會，
一小家，一商家，一小魚，
一小匣，一小冊，一小室，
一小卓，一小池，一小馬，
一責任，一拙文，一莊園，
一草屋，一大屋，一大家，
*一大業，一大綱，一大國，
*一大事，一大室，一大愛，
一段落，一電光，一田舍，
一都府，一美屋，一臂力，
一富家，一僻村，一茅屋，

一旅舍，一旅亭
一₁ 一巨屋，一世界
兩 兩親友，兩夫婦
三 三夫婦
°五 *五大洲
°十 *十五六，*十八九，十六七
廿 廿四五
2 順序+○○ 2
°第 *第一等，第二号
3 評鑑+○○ 22
英 英才子，英公使
奇 奇才子
°賢 *賢宰相
好 好伉儷，好女子，好男子，
好弟子，好夫婦；好氣候，
好時節，好天氣，好風景
秀 秀才子
真 真才子，真男兒
善 善著者
尊 尊叔君，尊夫人，尊婦人
惡 惡履歷
僞 僞才子
4 比較+○○ 10
°大 *大學士，大將軍；*大學校
大變革
°小 小車馬
他 他少年
古 古戰場

紅 紅手巾
 °金 *金時器
 伯 伯父母
 5 否定+○○ 3
 °不 *不條理, *不廉耻
 °無 *無慈悲
 (II) ○○+○
 1 ○○+助數詞 39
 家 兩三家
 回 四五回
 °月_ヲ 四五月, *五六月
 十一月
 °月_ヲ 歡娛月
 卷 十二卷, 數十卷
 時 一秒時, 十一時, 十二時,
 數分時
 度 數十度
 °日 一二日, *兩三日, 四五日,
 五六日, 數十日, 十餘日,
 三十日, 月曜日, 金曜日
 °人 *數十人
 °年 一兩年, 四五年
 十餘年, 二十年, *五十年
 部 數千部
 °步 兩三步, 三四步
 *數十步
 名 四五名
 數十名

°里 *一二里
 三十里, *數十里, 數百里,
 八十里
 2 ○○+人物 41
 °家 貨殖家, 窮理家, 金滿家,
 脩飾家, *政事家, 著述家,
 *著書家, 着書家, 讀書家,
 遊蕩家, 有名家
 °師 裁縫師, *說教師
 °者 痲病者, 隱遁者, 頑愚者,
 看護者, 狂顛者, *護國者,
 *初學者, 信教者, *探訪者,
 追捕者, *売嬌者, *無罪者,
 理學者
 商 裁縫商
 °人_シ 伊國人, *外國人, 黑鬍人,
 在官人, 地方人, 讀書人
 °人_シ 看護人, 質朴人, 尋常人,
 懲役人, *同行者, 木偶人
 輩 少年輩, 年少輩
 3 ○○+場所 6
 街 攝政街
 橋 西御橋
 °場 *商議場, 停車場
 地 所有地
 °部 *西北部
 4 ○○+建物 11
 °院 議事院, *狂顛院, 集議院,

治頤院
 °館 *公使館
 °局 郵便局
 °所 警察所, *裁判所, *製造所
 °廳 *警視廳
 店 裁縫店
 5 ○○+範圍 32
 涯 一生涯
 °間 *一時間, 一周間, *一週間,
 三週間, *三周間, 數月間,
 數時間, 二時間, 半時間
 後 婚姻後, 晚餐後
 前 晚餐前
 °上 交際上, 社会上
 °中 交友中, 女子中, 男子中;
 外遊中, 劇詞中, 口喙中,
 談話中
 程 三里程, 半途程
 °等 少年等, 女兒等;
 *會社等
 °內 一室內
 來 昨日來, 十年來, 數年來,
 積年來
 6 修飾+○ 36
 °花 紫藤花, *薔薇花, 水仙花
 °會 *博覽會

°官 *外務官, *警察官, 警視官,
 檢査官
 鏡 觀容鏡
 金 爲換金, 資本金, 贖罪金
 券 爲換券
 權 壓制權
 °國 開化國
 °紙 *新聞紙
 °書 紹介書, 診察書
 鐘 自鳴鐘
 舟 一葉舟
 °心 嫉妬心, 情欲心
 °政 *共和政
 尖 三角尖
 像 玉人像
 談 歸遣談
 °黨 *共和黨
 燈 讀書燈
 榻 雙肱榻
 °病 *癱瘓病, *神經病
 物 玩弄物, 所有物
 餅 合歡餅
 °簿 *會計簿, 財產簿
 7 狀態+○ 2
 然 呵々然
 的 徐々の

<『通俗花柳春話』の三字漢語>

[並立關係]

(I) ○+○+○ 0

(II) ○+○○ (名) 3

°過 *過不及

°士 *士君子

詩 詩文章

[修飾關係]

(I) ○+○○

1 數+○○ 7

°一 *一華族; *一大業, *一大事

°五 *五大洲

°十 *十五六, 十七八, *十八九

2 順序+○○ 5

°第 第二子

*第一等, 第二編, 第三編,
第四編

3 評価+○○ 2

°賢 *賢宰相

美 美男子

4 比較+○○ 8

°大 *大學士; *大學校

°小 小學校

常 常燈明

別 別天地

翌 翌々日

°金 *金時器

金五圓

5 否定+○○ 4

°不 不自由, *不條理, *不廉耻

°無 *無慈悲

(II) ○○+○

1 ○○+助数詞 18

°月 *五六月

間 數十間

冊 一二冊

所 二ヶ所, 數箇所

°日 *兩三日, 六七日

°人^ニ 四五人, 七八人, 兩三人
*數十人

°年 *五十年, 六十年

發 四五發

°步 *數十步

°里 *一二里, 四五里

*數十里

2 ○○+人物 13

°家 *政事家, *著書家, 法律家

°師 講談師, *説教師

°者 *護國者, *初学者, *探訪者,
*売嬌者, *無罪者

°人^ヲ *外國人, *同行人

主 負債主

3 ○○+場所 2

°場 *商議場

°部 *西北部

- 4 ○○+建物 9
- °院 *狂顛院, 國會院
 - °館 *公使館
 - °局 *郵便局
 - °所 *裁判所, *製造所
 - 署 警察署
 - 省 宮内省
 - °廳 *警視廳
- 5 ○○+範圍 14
- °間 *一時間, *一週間, *, *三週間, 十時間
 - °上 商業上, 政治上
 - °中 開會中, 本文中, 留主中
 - °等 *會社等, 宿泊等
 - °内 公園内, 沙漠内, 同國內
- 6 修飾+○ 19

- °花 *薔薇花
 - °會 *博覽會
 - °官 *外務官, *警察官, 書記官
 - °國 獨立國
 - °紙 *新聞紙
 - 酒 葡萄酒
 - °書 診断書
 - °心 老婆心
 - °政 *共和政
 - 石 金剛石
 - °黨 *共和黨, 反對黨
 - °病 *痙攣病, *神經病
 - °簿 *會計簿
 - 夜 十五夜
 - 欄 報告欄
- 7 状態+○ 0

以上から、三字漢語の語構成と文体との関係を整理すると、次のようになる。

	『欧州奇事』	『通俗』
[並立関係]	13	3
(I) ○+○+○	2	0
(II) ○+○○	11	3
1 ○+○○ (名)	5	3
2 ○+○○ (動)	6	0
[修飾関係]	298	101
(I) ○+○○	131	26
1 数+○○	94	7
2 順序+○○	2	5
3 評価+○○	22	2

4	比較+○○	10	8
5	否定+○○	3	4
(II)	○○+○	167	75
1	○○+助数詞	39	18
2	○○+人物	41	13
3	○○+場所	6	2
4	○○+建物	11	9
5	○○+範囲	32	14
6	修飾+○	36	19
7	状態+○	2	0

以上のように、『欧州奇事花柳春話』は、『通俗花柳春話』より三字漢語の語数が圧倒的に多く、語構成の種類も前者が並立関係3種、修飾関係12種、後者が並立関係1種、修飾関係11種で、前者の種類が多い。前者にあって、後者にないのは並立関係(I)の○+○+○と、○+○○の動作性のあるもの、修飾関係(II)○○+○の7の状態+○である。

そこで、それぞれの語構成の種類における所属語数(異なり)を比較すると、前者がほとんどの場合、後者より多いけれども、中には逆の場合もある。そこで、その差の著しいものについてみると、『欧州奇事花柳春話』が『通俗花柳春話』より著しく多いものは、修飾関係の(I)○+○○の語構成のうち、1 数+○○の型と、3 評価+○○の型、(II)○○+○の語構成のうち、1 ○○(数)+助数詞、2 ○○+人物、5 ○○+範囲、6 修飾+○にみられる。

逆に、『通俗花柳春話』が『欧州奇事花柳春話』より多いのは、(II)修飾関係の 2 順序+○○、4 比較+○○であるが、大きな差はなく、4 ○○+建物は、同じである。

したがって、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との語構成を比較したとき、型の種類の有無とともに前者が後者より著しく多いものが、漢文直訳体の特色ということになり、少ないものが、和文体の特色といえる。

(2) 丹羽純一郎訳『龍動新繁昌記』（明治11年）の用例カードの採集
前年度に引き続き、四編の用例カード採集を行い、完了した。

(3) 漢語研究のための著書、論文目録の作成

前年度に引き続き、新しく気付いたものを補充した。

(4) 国立国語研究所蔵「明治期刊行辞書目録」の作成と印刷

本年度は、漢語研究に参考となる国立国語研究所蔵の明治期刊行辞書目録を作成し印刷した。目録は(1)国語辞典類、(2)漢和辞典類、(3)対訳辞典類、(4)特殊辞典類、(5)百科事典類 に分け、さらに、それぞれの内容に応じて小分類を試みた。そして、各分類ごとに、刊行年順に配列した。

(5) 東京日日新聞の用語用字調査

昭和44～46年の3か年にわたり、科学研究費によって「現代語の形成過程に関する基礎的研究」を行った。そのさい採集したカードの一部を利用して、明治初期の用語用字調査を行うことにし、カードを再点検し、問題点を拾い出した。

E 今後の予定

来年度は、本年度の作業を継続し、下記の作業を行う予定である。

- (1) 『花柳春話』の自立語索引の作成と分析
- (2) 漢語研究に関する著書・論文目録の作成
- (3) 近代語資料の文献調査
- (4) 東京日日新聞の用語・用字調査

(飛田)

幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に 関する調査研究

A 目 的

幼児・児童における母国語の習得過程、および言語の習得と幼児・児童の人間的諸能力の発達との関係を、科学的に明らかにすることは、言語の教育の上で、まず解明されなければならない基本的な課題である。従来も、これらの問題を志向して研究してきたが、本年度より改めてこの問題に着手、まず、その基礎研究として、関係語をとりあげ、認識と語の意味理解との関係を明らかにしようとする。

なお、このたびの組織の改正に伴い、旧言語効果研究室で、「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」として実施してきた幼児の言語表現に関する研究も、結果を整理して、幼児の言語の習得に関する基礎的な資料にしようとした。

B 担 当 者

言語教育研究部第一研究室の村石昭三（室長）、岩田純一が担当し、川又瑠璃子が作業を助けた。なお、実験研究は、主として岩田が担当し、別掲の協力園の協力を得た。

C 本年度の作業

1 関係語に関する実験

被験者：3歳児；26名 4歳児；21名 5歳児；21名 6歳児；10名
計78名

調査語：〈前・後〉 〈上・下〉 〈左・右〉及び〈中〉

実験内容：

(1) 第1課題 方向性識別実験

実験者が見本図形を一定時間垂直呈示した後、同一図形を、水平に呈示

された2選択図形 (a, b) の中から選択する。5種
(例)

課題 I	V→H				
	丸				
刺	矢印				
	反応				
激	カップ				
	反応				
箱	箱				
	反応				
顔	顔				
	反応				

(注) ①上段が見本図形、下段が選択図形
②V→H：
垂直→水平

(2) 第2課題 2次元(前後)配置実験

実験者が状況を実物、絵によって設定し、〈前・後〉〈上・下〉にある対象を被験者に指示させる。5種







(例)

課題	対象物 方向性	状 況	マエVSウシロ		ウエVSシタ	
			マエ	ウシロ	ウエ	シタ
II 2次元 (前後) 配置	エンゼツ 実物					
	自動車 + 実物					
	自動車 + 絵					

(3) 第3課題 3次元(上下)配置実験

実験者が状況を実物、絵によって設定し、〈上・下〉〈前・後〉にある対象を被験者に指示させる。5種

(例)






課題	対象物 方向性	状 況	ウエ VS シタ		マエ VS ウシロ	
			ウエ	シタ	マエ	ウシロ
III 3次元 (上下) 配置	デズツク エンビツ 実物	 a				
		 b				
	飛行機 + 実物	 a ↑				
		 a ↓				
	飛行機 + 絵	 a ↑				
		 a ↓				

(注)

+: 方向性のある対象
-: 方向性のない対象

(4) 第4課題 積み木構成実験

図のような形相の積み木や絵を、垂直提示、水平提示して見せたあと積み木を使って見たものと同じものを構成させる。

課題	対象	形 相	垂 直	水 平
IV 構 成 課 題	実物 積み木			
	絵			
	絵 平面			

(5) 第5課題 言語伝達・理解実験

実験者が3次元の箱や2次元の円図形の各位置(上・中・下・左・右・前・後)におはじきを置き、おはじきは、箱のどこにあるかを被験者に聞く。また、実験者が被験者に箱とおはじきを手渡し、「おはじきを箱のどこどこに置いて下さい。」と指示して遂行させ、どの程度、空間関係の理

解語彙をもっているかを実験。

(6) その他 まえ，うしろの判断に及ぼす，対象のもつ内在的な方向性の影響をみるための小調査。

空間関係の相対性（対面者の左右は自分の左右と，逆である）の理解をみるための実験と簡単な訓練実験。

協力園：東京，荒川区，道灌山幼稚園（園長 高橋系吾）

東京，板橋区，帝京幼稚園（園長 沖永キン）

東京，江戸川区，ルンビニ保育園（園長 福井豊信）

2 文献資料の展望

「言語発達文体——展望・リスト」を作成するため，国内における現場の言語発達及び言語指導文献84点を収集した。なお，収集に際しては，全国都道府県教育委員会指導課，全国国立大学附属幼稚園，全国各県私立幼稚園協会研究部の協力を得た。

3 幼児の文構造の発達に関する調査

「幼児の文構造の発達に関する調査」は，これまで，旧言語効果研究室（旧第二研究部）で，同室員大久保愛が実施してきた（主たる結果は，報告書50『幼児の文構造の発達』である）が，今回の組織の改正に伴い，言語教育研究部第一研究室において，ひきつづき継続して調査の整理に当たることになった。結果の概要は別に掲げる。

D 今後の予定

昭和50年度は前年度に引き続き，関係語に関する実験を継続する。また，言語発達文献については，内外の文献を整理し，総合的な概観を得る予定である。

（村石）

現代児童・生徒の言語能力の動態調査

A 目 的

現代の児童生徒は社会的文化的変化とのかかわりのなかで、どのような言語能力を獲得しているか、その実態・特徴・問題点を主として文章表現力、文章表現行動の面から明らかにしようとする。

B 担 当 者

言語教育第一研究室の村石昭三（室長）が担当し、川又瑠璃子が作業を助けた。なお、補充調査の実施に際しては、別掲の協力量校、幼稚園の協力を得た。

C これまでの作業

本調査は昭和46年度からの継続調査である。昭和46年度は文章表現力に関する基礎調査を実施し、昭和47年度は中学生調査として、中学3年生の文章表現力に関する調査（東京、新潟、奈良の3都県、計18校、約700名）と表現行動の調査（計6校、各1クラスずつ）を実施した。次いで、昭和48年度は小学生調査として、小学6年生の文章表現力に関する調査（東京、新潟、奈良の3都県、計18校、約750名）と表現行動の調査（6課題の実作作文と書く生活に関するアンケート調査）を実施した。

D 本年度の作業

本年度は小学校児童を対象にして、文章表現力に関する補充調査と報告書作成のための採点、集計を行なった。

1. 文章表現力に関する補充調査

文章表現力の学年別発達変化を見るため、中学校2年生、小学校4年生、

同2年生，幼稚園児5歳クラス児，各年齢80名（ただし，幼児は10名），計250名について，文章表現力テストを実施した。なお，幼児の場合には便宜上，口頭表現の形式をとった。また，小学校6年生に関しては本調査で昭和48年度に実施済みである。

（協力学校，幼稚園）

新潟市立内野中学校（校長 今井誠一）

新潟市立大畑小学校（校長 谷沢隆一）

奈良市立若草中学校（校長 広岡宇三郎）

奈良市立椿井小学校（校長 川淵勝男）

東京都板橋区・帝京幼稚園（園長 沖永キン）

2. 報告書作成のための採点・集計

本調査「文章表現力テスト〈小学生用〉」（18校，約800名：再・テスト分を含む），妥当性・信頼性諸テスト（約700名），児童の書く生活のアンケート（約700名），作文指導法アンケート（約1,320名）について採点・集計を行なった。

E 今後の予定

昭和50年度は，文章表現力テストを主にした関連諸テストとアンケートとのクロス集計・分析，表現行動調査資料（作文他）の分析を経た上で，総括的な結論を得る予定である。なお，中学生調査に関しては，当時担当者根本今朝男（昭和49年3月31日，福岡教育大転出。）によって報告書のための原稿化が進められている。（村石）

F 文の接続関係能力の発達

——幼児から小学校6年生まで——

A 目的

幼児の文構造の発達については，国研報告50『幼児の文構造の発達』（文献1と呼ぶ）で，概括的なまとめを行ったが，就学前幼児では，連体修飾語

は複文構造をもつ形式が少ないとか、接続助詞「のに」「ので」などの使用が少ないとか、主語三つ以上をもつ並び構文とか、母体文に複文の挿入された、挿入構文の複雑な形式はあまり使わないとか、接続詞も「それで」「そして」を多用していて、しかも、逸脱した使用が多いというような結論を述べた。^(注1) 話しことばなので、言い誤りなどの見られるのは当然であるが、たとえば、幼児から小学校6年生まで、原因、結果の因果関係がはっきりしている同じ絵を見せて話させたらどうか。どのような発達が見られるか。幼児文の接続関係能力の位置づけも得られるのではないかと、文献1の検証の意味もこめて小調査を試みることにした。

B 担当者および本年度の作業

この研究は、言語教育研究部第一研究室の久保愛が担当した。

本年度の作業については、昨年度（昭和48年）、東京都千代田区立九段幼稚園で、年中児クラス27名（男15名、女12名、欠席児を除きクラス全員）について、6月（4歳3～5歳2）と2月末（約8か月後）に調査を行ったのに引き続き、^(注2) 東京都大森区立梅田小学校の2年、4年、6年、各20名（男女各10名、I Q 110前後の中間児）に、^(注3) 同様（後に述べる）の調査を行った。この調査は、幼稚園では、原田愛子、田辺黎子、小学校では、小林喜三男および学年担当の諸先生のお世話になった。

調査方法は、幼児を一人ずつ別室に呼び出し、調査者が別図のような三こまと四こまの絵をつごう五種類みせて、その絵について幼児に話させ、それを録音器に採り、のち文字化するというものである。ここではそのうちの四種類について分析した。

四種の絵を見せる前に、その絵を接続助詞、あるいは接続詞を用いて話してもらうために、訓練テストを行った。つまり、接続関係をもつ簡単な二枚の絵を見せて、被験児に話をさせ、のち、調査者が正答を教え、被験児に、その答を復唱させることを行ったのであるが、ここでは省略する。^(注4)

四種の絵のうち、IとIIIは、文献1の資料と、同じものである。（IIIは、

三こまの絵を四こまに拡大し、三番目の絵が加わったが、筋は変わらない。）

Iは順接、IIは逆接で、三こまの絵、IIIとIVは順接であるが、四こまの絵である。

C 結果

調査した被験児の話しことばを次のような面からまとめてみた。

- (1) どのような形式の文で話すか。
- (2) 並び構文および挿入構文をどのような接続語（接続助詞とか中止形）で結合させているか。
- (3) 文と文をどのような接続詞で連結しているか。
- (4) 連体修飾語の使用はどうか。

次に、出題者の予想する正答案例（もちろん、この通りに答えなくてもよいのであるが、このような内容であることと、このような接続助詞、接続詞を用いてほしいというものである）をあげておく。傍線の部分が接続関係語である。

I の問題

- 1) 花がしおれているので（から）。

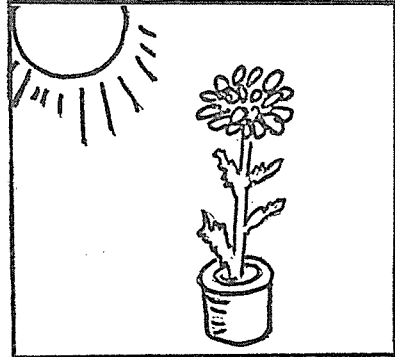
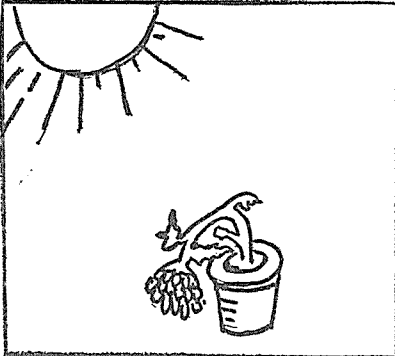
（注1）接続詞については、『年報22』（昭和45年度）にも述べた。

（注2）同一児に、年中児の間2回、同一問題で調査してみた。6月は、幼稚園教育を受ける以前に近く、年度末の2月は、むしろ、年長児に近いと見てその間の発達を見たかったからである。整理に当って、年中6、年中2と略称を用いた。

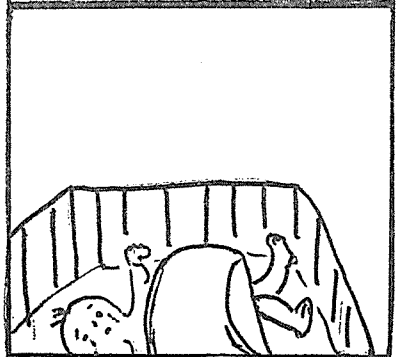
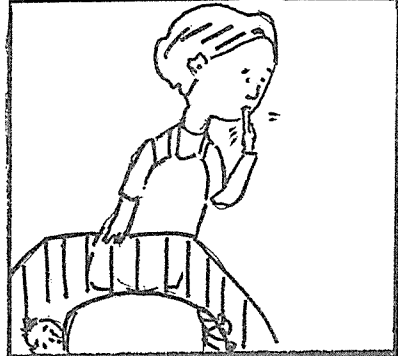
（注3）欠けている学年についても調査をしたかったのであるが、このたびは見送った。参考として、小学校2、4、6年には、別クラス全員に絵を見て文を書かせたので、「書きことば」の略称のもとに結果をあげておく。

（注4）小学校の場合は、「文に切って話してごらん」「文をつないで一文で話してごらん」と、これら両方を区別して話すことができるであろうと思い、この二種で話すように指示したが、低学年の場合はあまり成功しなかった。その点、幼児の場合は自由に話させたので調査法に差がある。

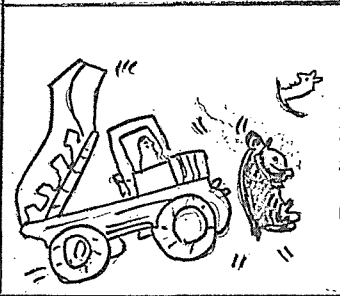
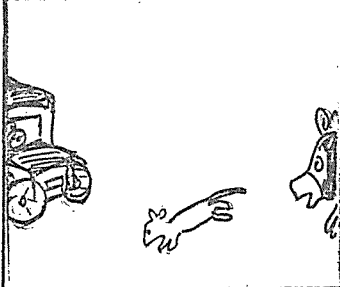
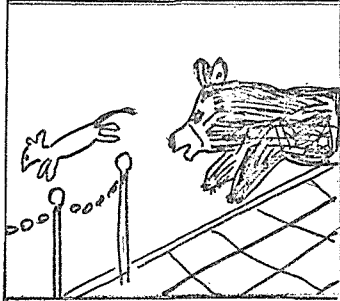
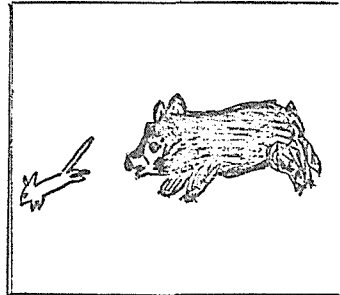
I



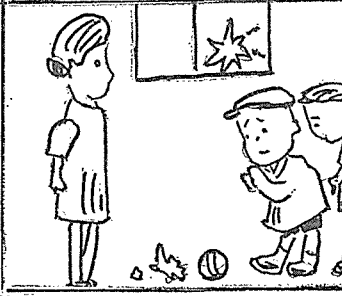
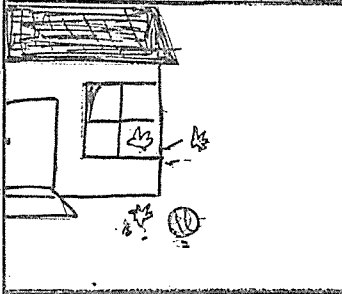
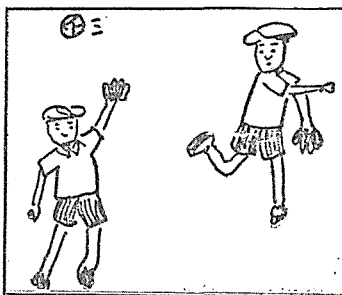
II



III



IV



- 2) おじさんがじょうで水をやったら,
- 3) 花が生きかえた。

あるいは、

- 1) 花がしおれているので(から),
- 2) おじさんがじょうで水をやっています。
- 3) そしたら, 花が生きかえました。

IIの問題

- 1) シーってお母さんが言ったのに,
- 2) 男の子がたいこをたたいたので,
- 3) 赤ちゃんは泣き出しました。

あるいは、

- 1) シーってお母さんが言ったのに,
- 2) 男の子がたいこをたたきました。
- 3) それで, 赤ちゃんは泣き出しました。

IIIの問題

- 1) くまがねずみを追いかけていたら,
- 2) ねずみが道に飛び出したので(から), くまも道に出たら,
- 3) ダンプカーが来て,
- 4) ねずみとくまは, はねとばされてしまいました。

あるいは、

- 1) くまがねずみを追いかけていたら,
- 2) ねずみが道にとび出したので(から), くまも道に出ました。
- 3) そしたら, ダンプカーが来て,
- 4) ねずみとくまは, はねとばされてしまいました。

VIの問題

- 1) 男の子がボールなげをしていたら,
- 2) ボールがよその家の窓ガラスをわってしまったので(から),
- 3) あわてて逃げようとしたら,
- 4) おばさんに叱られました。

あるいは、

- 1) 男の子がボールなげをしていたら、
- 2) ボールがよその家の窓ガラスをわってしまいました。
- 3) それで、にげようとしたら、
- 4) おばさんに叱られました。

1) どのような形式の文で話すか

幼児・児童の話した文を九つの類型に分けて調べてみたのが、第一表である。次に、各類型の説明と用例（幼児を中心にしてあげる）および、表にあらわれた結果を述べる。

A＝接続助詞、接続詞などの接続関係のことばを用いないで、二文以上の文で話しているもの。数は少ない。

例：オハナガ コワレタノ。オハナニ ミズ カケテンノ。オハナニ ミズ カケタノ。（年中6）

例：オハナガ シオレテ イマス。オトコノ コガ ミズヲ ヤリマシタ。また ゲンキニ ナリマシタ。（6年）

用例の二つは、同じ形式に属しているとはいえ、幼児のほうは文と文の連結ができていないのに対して、6年生のほうは、接続助詞、接続詞を用いなくても、「また」という副詞を用いて関係づけている。この場合「また」より「そしたら」を用いたほうがよいが。

B＝二文以上の文で話し、接続詞のみ使用。これもそう多くない。年齢別に見ると6年が多い。

例：(マタ)^(注) タオレチャッタ。^(ソ) イデ マタ ミズ アゲタノ。^(ソ) シタラ マタ (マタ) マスグニ ナッタノ。（年中6）

例：アノー ハチウエノ ハナガ シオレテ シマイマシタ。ソコデ ミズヲ アゲマシタ。ソウシタラ ハナハ イキイキト シマシタ。（6年）

(注) かつこの中は、そのように聞こえたというもの。文例の最後のかつこは、年齢を示す。〔 〕は注釈。年中6は年中児6月調査のもの、年中2は年中児2月調査のをさす。

第一表 九つの類型に分けた結果（パーセント）

年齢 問題 類型	年 中 6					年 中 2					2 年				
	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計
A	7.4				1.9		11.1			2.8	3.5		3.5	3.2	2.6
B	3.7		7.4	11.1	5.6	7.4	3.7	3.7	7.4	5.6	6.9			3.2	2.6
B'	7.4	11.1	33.3	37.0	22.2	29.6	14.8	37.0	51.9	33.3	17.2	3.7	13.8	22.6	14.7
B''	3.7	7.4	7.4		4.6	3.7		11.1	3.7	4.6	13.8	22.2	20.7	25.8	20.7
C						3.7				0.9					
C'	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	18.5	7.4	14.8	11.1	13.0	6.9		3.5	3.2	3.5
C''	3.7			3.7	1.9	33.3	22.2	25.9	22.2	25.9	41.4	33.3	48.3	35.5	39.7
D	40.7	48.2	33.3	29.6	38.0	3.7	37.0	3.7	3.7	12.0	6.9	29.6	6.9	6.5	12.1
E	29.6	29.6	14.8	14.8	22.2		3.7	3.7		1.9	3.5	11.1	3.5		4.3

幼児も6年もほとんど同じ表現であるが、6年のほうが適切な語彙を使用している。のちにも出るが「そこで」は4年から使用。

B'＝二文以上の文で話し、接続助詞、接続詞を使用。この形式の文は多い。一位である。年齢別に見ると、年中2、4年、6年は一位、年中6は2位、2年は三位。

例：ネコガ ネズミヲ オッカケテネ ナンカノ トビコミ、ソンドネー エート
ネ ネズミ ヒカレソウニ ナッタノ。ソシテ ニゲタノ。ソシテネ トラク
クガネ アブナイッテ イッテネ コレヲネ ヤッチャツテルノ。ソシタラ
ガーッテ（ ）ノ。（年中6）

例：クマト ネズミガ オイカケッコヲ シテ イマシタ。ネズミガ ガードレー
ルヲ デテ シマイマシタ。ソレデ クマモ オイカケテ イッタノデ イッ
ショニ トラックニ ブツカッテ シマイマシタ。（6年）

B''＝二つ以上の文で話し、接続助詞のみ使用。これは幼児に少ない。2年はB'より多く、4年、6年はB'より少ない。

例：クマサンガネ ネズミ コトネ ツカマエヨウト オモッタラ ネズミガ
ネ ドウロニネ デタラネ アノネ クルマダーツ オモッテネ ニゲチャ
ッタラネ クマサントネ ブツカッチャッテネ アノネ ネズミサンガ ニゲ
ターネ オウチヘ カエッタ コトデショ。クマサンガネ マエニ イルト
クルマニ ヒカレルカラ。（年中6）

4 年					6 年					総 計					順位
I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	
		2.9		0.7	2.7	2.4	7.3		3.2	2.5	2.5	3.1	0.6	2.2	(8)
2.6		5.7	2.9	2.7	10.8	4.9	14.6	10.3	10.1	6.3	1.9	6.9	6.9	5.5	(5)
29.0	44.7	34.3	51.4	39.7	18.9	31.7	36.6	41.0	32.3	20.9	23.8	31.5	40.9	29.3	(1)
18.4	15.8	28.6	11.4	18.5	27.0	14.6	9.8	18.0	17.1	13.3	12.5	15.7	12.6	13.8	(3)
										0.6				0.2	(9)
2.6				0.7	8.1	4.9	9.8		5.7	7.6	3.1	6.3	3.1	5.1	(6)
44.7	39.5	28.6	34.3	37.0	29.7	39.0	22.0	30.8	30.4	31.7	28.8	25.3	26.4	28.0	(2)
					2.7	2.4			1.3	9.5	20.0	7.6	6.3	11.1	(4)
2.6				0.7						6.3	7.5	3.8	2.5	5.0	(7)

例：クマト ネズミガ オイカゲッコヲ シテ イマシタ。ネズミガ ホドウニ
 デテ シマッテ クマモ ソレヲ オイカゲマシタ。ニヒキトモ ホドウニ
 デテ シマッタノデ クルマニ ブツカッテ シマイマシタ。(6年)

年中の場合は、この程度の内容は、D. E.に入れなかった。以下同じ。6年の例で使っている「て」の使用はおかしい。「から」か「ので」であるべきところ。話しことばのためだろうが、指示語の「それ」を用いて、もたついた言い方をしている。

以上AからB'までは、二つ以上の文から成る発話である。以下CからC'までは一つの文から成る発話である。

C＝一文で話し、接続関係語なしのもの。これはおかしい文なので、この一例のみである。Dに入れてもよいものである。Dの中にも、ここに属してよいものが見られるが、内容の点でここには入れなかった。

例：カレテル オハナトネ ミズヲ アノネ ミズヲ クンデルネ コドモトネ
 カレテナイネ オハナガ アルノ。(年中2)

C'＝一文で話し、接続助詞、接続詞共に使用。これも全体に少ないが、年中2にはわりにある。他よりめだっている。接続助詞+接続詞の形式をもつ文なのである。(太い傍線の部分) 幼児に文意識がないせいだと『幼児の発話の構造と発達』(国研『ことばの研究第4集』以後文献2と呼ぶ)

で述べたことがある。のちにまた述べる。

例：エートネ ヤキュー ヤッタラネ ボール ガラスニ ボール、ガ ボールガ
ネ ガラスニ〔をの意〕ワッチャッタラネ ソウシテネ ソノ オンナ（ノ）
ヒトガ デテ キテネ（アソビ）ナサイッテ イッテネ ゴメンナサイ ゴメ
ンナサイッテ イッ（タノ）。（年中6）

年中2の例をあげると、次のようである。

例：（エー）ト…… オジイサンガ ハナヲ サカセテ ソノガ オレテ シマッ
テ マタ ミズヲ ヤッテ ソイデ ハナガ サキマシタ。（年中2）

例：アカチャンガ ネットルカラ シズカニ シテッテ ユッテ ソウシテ…… コ
ドモガ アカチャンノ トコロニ イッたら ソウシたら ウルサクッテ ソ
ウシテ アカチャンガ ナイチャッタノ。（年中2）

例：アノネ クマガネ ウサギヲ オイカゲテネ アノネ クマガ ウサギヲ オ
イカゲテネ ソシテ クマガネ アノネ ウサギヲ オイカゲテネ クルマニ
ブツカルカラネ クマガ トマッテネ アノネ トラックニネ クマノ オシ
リガ ブツカッタノ。（年中2）

C'＝一文で話し、接続助詞（中止形も含む）のみ使用。これは2年が一番よく使用。年中6が非常に少ないのが特色である。

例：アノネ ア（ノ）オニイサンタチガネ ボールゴッコ シ（テ）ヤキューゴッ
コ シテネ アノネ ボールヲネ ガラス ^{（ツ）}_{（ン）} トコニネ ヤッチャッタ
ラネ ボールン トコニネ ガラス オウチノ（コ）デネ ボール ポーイッ
テ ヤッタラネ オカアサンニ シカラレタノ。（年中6）

例：コドモガ キャッチボールヲ シテ イテ、ヒトリノ コドモガ トリソコナ
ッテ、ガラスヲ ワツテ シマッテ、オゴラレナイ ウチニ ムコウニ イコ
ウト オモッタラ センセイニ ミツカッテ オゴラレテ アヤマッタ。（6
年）

年中6のは、Dに入れてもよいものかもしれない。6年のは、「～て～て～て」で、よい文ではないが、点線の連体修飾形式を使って、理由づけをしている。連体修飾語についてはのちに述べる。

D＝話してはいるが、話の内容のちがすぎるもの。年中6がいちばん多

く、ついで年中2と2年が同数で、4年、6年はほとんどない。問題別では、逆接の接続語を必要とするIIがいちばん多く、ついでI、III、IVの順となっている。IVの問題は身近な話題なのでやさしかったようである。

例：タイヨウデ ハナガ カレテ $\left(\begin{smallmatrix} \text{ル} \\ \text{ン} \end{smallmatrix}\right)$ デショ。ハナ ヤッタラ ノビタ。(年中6)

例：ココ アガッテ イッテ コレ オカアサン。アット コウ ヤッテ オトシ
チャッタノネ。ソウ。コレ オリテ イコウト シテルノ。コレ ミズ クン
デ キテルノ。ネ？(略) (年中6)

後の例は、後半が繰り返かえしなので略したが、絵のまずさに影響されたのかもかもしれない。

E＝一こまの絵すら十分に話していない。文が中断している。あるいはなんとも言わない、「わからない」という、などが入る。これは年中6がいちばん多い。ついで2年、年中2。2年にはIVを除いて何も言わない子が一人いた。言わない子は、4年1名、6年にはいなかった。問題別に見ると、IIが多く、I、III、IV。Dと同じ傾向である。

例：オミズネー イッパイネ アゲルトネ オレチャ(ウ)。(年中6)

例：ナンダクケ ワスレチャッタヨ。コレヲ ワスレチャッタヨ。(年中6)

例：ネズミガネ ドウロ ワタツテネ クマガ ドカシテ クレテネ ソウシテネ
ソウシテ……。 (年中6)

例：ヤキュウ シテル トコロ。ワカンナイナ。(年中6)

文を切って話す(A+Bグループ)か、一文で話す(Cグループ)か、それら分類に入らない(Dグループ、D・Eグループの一部)か、の三種に分けて、年齢別に見ると次のようなパーセントになる。

	A+Bグループ	Cグループ	Dグループほか
年中6	64.8	22.2	13.0
年中2	49.1	50.0	0.9
2年	44.8	48.3	7.6
4年	61.6	37.7	0.7
6年	63.3	36.7	なし

一文で話すことが多くなるのは、年中2になるころのようである。年中6は、まだ、一文で話すのは少ない。しかし、また、4年、6年になると、一文で話すこともできるが、二文、三文と文を切って話すことを問題によって選択することができるようになっていく。小学校教育を受け、文意識を習得するからであろう。上表を見ると、2年ではまだ一文で話すほうがいくらか多い。それが4年、6年となると、かえって文を切って話すほうが多くなっていく。調査者が「文に切って話してごらん?」と、「文をつないで話してごらん?」という指示を与えたにもかかわらず、このような傾向を示したことは、そのことを物語っているように思える。年中6の場合は、前にも述べたが、因果関係を持つ三こま、四こまの絵を関連づけて話すのがまだむずかしいということになる。

次に、これら絵を何文で話しているかを見ると、全体では、一文から八文までを使用し、四文までで90%以上を示め、五文以上は3.8%と少ない。

一人平均文数を見ると、1.5文から5.4文の間で一つの絵を話している。

年中6が2.7文と多く、年中2が1.9文、2年が2.4文、4年が4.3文、6年が4.5文となり、4年になると、2年から飛躍してよくしゃべっている。年中6が多いのは、調査者の聞きかえしによる返答などがあるからである。問題別に見ると、全体では、I II III IVの順で多くなる。III IVの文が長いのは四こまの絵だから当然である。

小学校の場合は、「書きことば」と比較すると以下のものである。「書きことば」では、一文から二十文まであって、4年が二十文と長く、2年が十文、6年が六文と短い。一人平均文数でも、4年が5.2文と長く、ついで、2年が3.0文、6年が2.1文と短くなっていて、話しことばと同じ傾向を極端な形で表わしている。4年は、物語的に構成して絵の話を書いているのが特色で、6年は、それらかざりとか空想を捨てて、簡潔な文章になっているのである。しかし、3年、5年の調査がないので、4年、6年になるとそうなるのだと断言できないのが残念である。

2 どのような接続助詞（他）を使用しているか

接続助詞（他）について傾向を見ると第二表のようになる。全体から見ると、「て」の使用が一番多く、53.3%、ついで、「たら」13.9%、「ので」11.5%、「から」8.8%、その他となっている。各年齢で多く使用している順にあげると、年中6は、「て」「たら」「から」の三種の接続助詞で90%以上を占め、年中2は、「て」「から」「たら」、2年は、「て」「たら」「ので」「から」、4年は、「て」「ので」「たら」「中止形」「て」「が」「から」と、6年は、「て」「ので」「たら」「中止形」と「が」「から」となっている。年齢を重ねるにしたがって、接続助詞（他）のふえていることがわかる。筆者が正答案としてあげたのでは、「て」「ので」「たら」「から」「のに」ですむところであるが、子どもたちは、文章語的中止形なども使用しているのである。

前に、文献1^(注)で、年中児使用の接続助詞（他）を、使用頻度の高い順にあげたが、「て」「から」「たら」「と」「けど」「で」「ので」「ば」「たり」「し」であった。「のに」「中止形」「ても」「(ず)に」は出ていない。文献1で、幼児の接続助詞使用例をくわしくあげたので、ここでは一々について述べず、問題のある助詞についてのみ述べることにする。

今度の調査では、IIの問題で逆接「のに」の使用を求めているが、年中6で一名、年中2は二名で、2年、4年、6年でも少ない。中止形は、年中6で使っているが、「コレネ オジサンガ ジョウロ アゲ、エトー オミズ アゲタラ イッ サイタノ。」という例で、中止形というより、「言いさし」というべきである。だから、中止形の使用は、4年からということになる。中止形とは、「咲き」「気がつかず」「逃げていき」「あたり」などの言い方である。複合動詞の連用形止がここではめだっている。中止形も文章語の表現であるが、小学生を調査したためか「ないで」でなく「(ず)に」が4年か

(注) 文献1と同じ「ことばのカード集」を資料として使っている 国研報告55『幼児語の形態論的な分析』（高橋太郎担当）にも、用語の用い方はちがうが、中止形として「て」「から」「たり」、条件形として「たら」「なら」「と」、ゆずり形として「ても」「たって」について、幼児の使用の実態を述べている。

第二表 接続助詞（他）の使用数（パーセント）

年齢 問題 接続助詞	年 中 6					年 中 2					2 年				
	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計
	て	36.6	57.7	61.3	68.4	58.7	48.4	40.8	70.8	54.7	55.0	49.1	66.7	67.4	57.4
たら	22.0	17.3	17.5	19.0	18.7	16.1	16.3	13.8	20.0	16.7	21.1	7.7	8.1	18.8	13.7
から	31.7	17.3	13.8	11.4	16.7	30.6	34.7	9.7	12.0	20.2	12.3	10.3	5.8	7.9	8.7
ので							4.1	2.8	1.3	1.9	14.0	10.3	14.0	5.9	10.6
のに		1.9			0.4		2.0		1.3	0.8		2.6	1.2	1.0	1.2
けど			2.5		1.2	1.6		1.4	4.0	1.9	1.8			5.0	1.9
けれど	2.4														
けれども															
で	2.4	1.9	3.8		2.0			1.4	1.3	0.8	1.8	1.3		1.0	0.9
と	2.4	1.9		1.3	1.2	1.6	2.0		2.7	1.6		1.3	1.2	1.0	0.9
が									1.3	0.4			1.2		0.3
ても			1.9	1.3	0.8								1.2	2.0	0.9
ながら									1.3	0.4					
(ず)に															
たって						1.6				0.4					
中止形	2.4				0.4										
一人平均数	1.5	1.9	3.0	3.0	2.3	2.3	1.8	2.7	2.8	2.4	2.9	3.9	4.3	5.1	3.0

ら少ないが出ている。

「ので」は、年中6では全く用いられず、「から」を使用しているが、年中2は、1.9%と出てくる。しかし、年齢があがるにしたがって2年10.6、4年20.1、6年17.2と多くなり、小学生では、「から」を追いぬいてむしろ、「ので」を使用している。このことについては、子どもは小さければ小さいほど、理由を述べる場合、「～だから～だ」という複文形式で話さないで、調査者の「どういうわけで？」という質問を待って、「……だから。」という単純な文で話すことが多い。たとえば、「水をあげたから。」「ガラスをわったから。」「うるさかったから。」というふうに答える。「……ので。」と、「ので」を文末に用いないから、原因や理由を述べる場合、まず最初に「から」を（「ので」より）用いることが多いのだろうか。(注) また、どちらかという、「から」が話しことば的で、「ので」が文章語的であるということも理由の一つになるかもしれない。

次に一人平均接続助詞（他）使用数を見ると、年中6の1.5個から4年の

4年					6年					総計					順位	
I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計		
44.3	45.1	48.0	57.6	49.1	43.3	39.8	51.3	49.6	46.3	44.8	49.4	59.2	57.0	53.3	(1)	
14.8	7.4	4.0	9.3	8.6	25.4	15.9	11.8	10.3	14.9	3.2	11.8	10.6	14.7	13.9	(2)	
	4.5	4.1	1.0	2.5	3.0		5.7		0.9	1.7	13.7	11.3	5.8	6.1	8.8	(4)
	23.9	23.0	22.0	12.7	20.1	17.9	23.9	11.8	15.4	17.2	13.0	15.2	10.9	8.2	11.5	(3)
		1.6	2.0	0.8	1.2		4.5	1.3		1.4		2.6	1.0	0.6	1.1	(10)
	2.3	0.8			0.7			1.3	3.4	1.4	1.6	0.3	1.0	2.4	1.4	(9)
	1.1	3.3	7.0	5.1	4.2	3.0	1.1			0.9	1.6	1.8	2.7	1.6	1.9	(8)
	4.5	3.3	2.0	0.8	2.6	4.5	2.3	9.2	4.3	4.9	2.9	2.3	2.4	2.0	2.4	(6)
	1.1	1.6	6.0	6.8	4.0		1.1	1.3	9.4	3.7	0.3	0.8	1.9	4.1	2.0	(7)
		0.8			0.2		3.4			0.9		1.3	0.5	0.4	0.6	(11)
		1.6			0.5			1.3	0.9	0.6		0.5	0.2	0.4	0.3	(13)
		3.3	1.0		1.2		1.1			0.3		1.3	0.2		0.4	(12)
										0.3					0.1	(14)
	3.4	4.1	7.0	4.2	4.7	6.0	1.1	10.5	6.0	5.7	2.5	1.5	3.6	2.4	2.5	(5)
4.4	6.1	5.0	5.9	5.4	3.4	4.4	3.8	5.9	4.4	2.8	3.4	3.6	4.3	3.5		

6.1個に渡っている。4年がいちばんたくさん使用しており、次に6年、2年、年中6、年中2となっている。

「書きことば」と比較すると、条件形（原因）では、「たら」や「と」以外に「なら」「ば」を4年で各一名が用いている。その他「たり」を一名が

(注) 永野賢「からとのとはどう違うか」(『国語と国文学』29巻2号)で、先学の文献もあげながら説明しているが、その中から、年中2までは、「の」を使用しない理由づけになるものを選んであげてみる。

- ① 「から」のほうが用法が広いこと。(下が命令、主張、想像などになっている場合は「の」を用いない。)
- ② 「から」は、「……からです」「……からだ」というふうに、「だ」「です」と結んで述部に用いられるが、「の」は、「のです」「のだ」とは用いられない。また、「……ですから」のような半終止に用いられるが、「でしょう」ののとは言わない。
- ③ 一般にていねい体るときには、「から」よりも「の」のほうが多く使われる。(幼児のばあい「ていねい体」は習得がおくれる。筆者注)など。

用いている。文献1に出ていた「し」は出ていなかった。これらは問題の絵によって限定されることはいうまでもない。なお、「書きことば」では、4年17種でいちばん多く、6年10種、2年8種であった。話しことばより種類が多いのである。

最後に、接続助詞の逸脱した使用例をあげておく。IIの問題で、「のに」が使用できないためのものが多い。年中6はEが多いが、年中6の例は調査者が正答を与え模倣させたができなかったものである。(傍線の部分)

例：オカアサンガ シズカニ シナサイッテ イッテ(るのに) ネ オニイサンガ
ネ タイコ タタイトルカラ アカチャン ナイチャッタノ。(年中6)

状況説明的になっている。接続助詞「て」が多い理由にもなる。

例：ベッドデネ シーッテ イッたら(ても、てるのに) ネ オトコノコガネ タ
イコ ポンポンコ ヤツカカラネ エーンエーン ナイチャッタノ。(年中6)

2年以上でも次のような状況説明的例がある。

例：アカチャンガ ベッドデ ネテテ, オカアサンガ シート イッテ, オトコノ
コガ キテ, タイコヲ タタイトカラ アカチャンガ オキチャッタ。(2年)

例：アカチャンヲ オカアサンガ アヤシテ イテ オカアサンガ イッテ シマ
ッテ コドモガ キテ ソレデ コドモガ タイコミタイナノヲ タタイト
アヤシテ イテ ダレモ イナク ナッたら アカンボウハ ナキダシタ。(6年)

4年、6年のよくできた例をあげると、次のようである。

例：コドモガ アソンデ イテ オカアサンガ アカチャンガ ネタノデ シズカ
ニ シナサイト イッテ イタノニ コドモモチハ タイコヲ ナラシタリ
シテ アカチャンヲ オコシテ シマイマシタ。ソレデ アカチャンハ ナイ
テ シマイマシタ。(4年)

例：オカアサンガ シズカニ シテト オトコノコニ イッテ ドッカニ イッテ
シマッたら オトコノコガ キテ ウルサク シタノデ アカチャンガ オキ
テ シマッテ ナイテ イル トコロデス。(4年)

例：オカアサンガ シズカニ シナサイト イッテ イマス。トコロガ オトコノ
コハ ガンガント タイコヲ タタイト イマス。アカチャンハ イッマデ
タッテモ ナキヤミマセン。(6年)

例：オカアサンガ アカチャンヲ ネカセル タメニ シズカニ シナサイト イ
ッテ ドコカニ イッテ シマイマシタ。ソシタラ イエノ オニイサンガ
タイコヲ ドンドンドン タタイタノデ アカチャンガ ナイテ シマイマシ
タ。(6年)

年齢がすすむにしたがって、のちに述べる接続詞・連体修飾語など(点線で示した)を上手に使用している。

筆者は、「接続助詞+接続詞」という単位文^(注)と単位文を連結する並び構文の一種を幼児がよく使用すること、それが年少になく、年中から年長へと多くなることを文献2でかつて述べたことがある。そこで、今度の場合はどうだったかを見ることにする。年中6は14回、年中2は29回、2年10回、4年6回、6年10回という数であった。文献2と同じような結果と言える。

形式では「て+接続詞」がいちばん多く、「て、それで(て、で)」「て、そ(う)して」「て、それから」「て、そうしたら」「て、そこで」、その他は、「から、それで」「から、そして」「から、だから」「たら、それで」「たら、そして」「たら、そしたら」「たら、そんなら」「ので、そして」「ので、そしたら」などが見られた。話しことばなので、接続詞を間投詞的に使用している例もあるが、文を「～て～て～て」とつないで話すのと同様、文意識がないためであろう。48ページに用例をあげてある。

3 どのような接続詞を用いているか

文と文を連結させ、関連づける接続詞の使用を見ることにする。第三表参照。全体数を見ると、一位は「そ(う)して」(「して」を含む)、二位は、「それで(そいで、そんで)」「で」を含む)で、三位は、「そ(う)したら」(「したら」を含む)、この三種で約75%を占めている。その他をあげると、「(そう)すると」「それから」(「から」も含む)「でも」「だから」「そこで」「ところが」「け(れ)ど(も)」「それでも」「それなので」「しかし」「そんなら」を用いている。文献1でも見られた、まちがいと思われる「そうして

(注) 単位文については、文献1(68ページ)でも述べたが、「主語と述語の結びつきが一回おこなわれているもの」を指す。

第三表 接続詞の使用数（パーセント）

接 続 詞	年 齢 問 題					年 中 6					年 中 2					2 年				
	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計
	(い) (ん) それで で	38.1	32.3	32.6	37.0	34.9	47.6	41.2	25.9	20.6	31.3						11.1	10.0	7.1	6.7
(そ(う)して して	9.5	38.7	54.4	35.2	38.2	28.6	23.5	55.6	58.8	45.5	35.0	33.3	70.0	42.9	42.2					
(それから (たら, から)	9.5	9.7		1.9	4.0	4.8		7.4	2.9	4.0	16.7	22.2	20.0	14.3	17.8					
(そ(う)したら したら	19.1	12.9	10.9	18.5	15.1	14.3	23.5	11.1	8.8	13.1	41.7	33.3		21.4	24.4					
だから	19.1			7.4	5.3		11.8		8.8	5.1	8.3				2.2					
けど けれども けれども											8.3				2.2					
でも	4.8	3.2			1.3														14.3	4.4
それでも			2.2		0.7															
そんなら						4.8							1.0							
(すると そうすると そこで (それ)なので ところが しかし 誤用																				
一人平均数	0.8	1.2	1.7	2.0	1.4	0.8	0.6	1.0	1.3	0.9	0.6	0.5	0.5	0.7	0.6					

から」「そうしても」は、前者は4年、後者は年中6が一名ずつ用いている。

年齢別に見ると、年中6は、「そ(う)して」「それで」を主として用い、
ついで「そ(う)したら」。年中2は、年中6とほぼ同じ傾向である。(文献
1では、「それで」が半分を占め、「そして」「それから」「そ(う)したら」
～の順で、「そ(う)したら」は、4.8%と少なかった。今度の話題が、因果
関係を持つ絵であるので「そ(う)したら」が多くなっているのかもしれない。
) 小学校に入って、2年は、「そ(う)して」「そ(う)したら」「それから」となり、
幼児のよく使用する「それで」が少なくなってきた、「そ(う)したら」「それから」
が多くなっている。4年は、「そうして」「そ(う)したら」「それで」の順になっ
て、「それで」がまた多くなるとともに接続詞の種類が多くなってくる。特に「
でも」は他より多い。ふえた接続詞をあげる

4 年					6 年					総 計					順位
I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	I	II	III	IV	計	
5.3	18.2	23.8	14.7	16.1	25.0	8.0	18.0	11.4	15.1	25.8	23.1	25.0	21.6	23.6	(2)
26.3	31.8	23.8	35.3	28.0	15.0	12.0	12.8	11.4	12.6	20.4	27.9	38.6	35.7	32.1	(1)
			2.9	1.1			2.6	2.9	1.7	5.4	4.8	3.6	3.5	4.1	(5)
36.8	18.2	23.8	20.6	24.7	30.0	40.0	33.3	37.1	35.3	26.9	24.0	18.6	21.1	22.1	(3)
										5.4	1.9		4.1	2.8	(7)
			8.8	3.2		4.0		2.9	1.7	1.1	1.0		2.3	1.2	(4)
5.3	27.3	9.5	8.8	12.9			2.6	2.9	1.7	2.2	6.7	2.1	3.5	3.5	(6)
	4.6			1.1		4.0	5.1		2.5		1.9	2.1		1.0	(11)
										1.1				0.2	(13)
5.3		4.8		2.2	15.0	12.0	20.6	25.7	19.3	4.3	2.9	6.4	5.3	6.9	(4)
10.5		4.8	2.9	4.3	15.0	4.0	2.6	2.9	5.0	5.4	1.0	1.4	1.2	2.0	(8)
5.3				1.1		4.0			0.8	1.1	1.0			0.4	(12)
		9.5	5.9	4.3		8.0		2.9	2.5		1.9	1.4	1.8	1.4	(9)
						4.0	0.9		1.7		1.0	0.7		0.4	(12)
5.3				1.1						1.1	1.0			0.4	(12)
0.5	1.1	0.9	1.7	1.2	1.0	1.3	2.0	1.8	1.5	0.8	0.9	1.2	1.5	1.1	

と、「そこで」「(そう)すると」「ところが」「(それ)なので」「それでも」。
6年は、断然因果関係の展開を表わす「そ(う)したら」が多くなり、ついで、結果をのべる「(そう)すると」も多く、そのあとに「それで」「(そう)して」と続いている。種類も4年と同様にふえてきている。接続詞の面から見ても、6年になると因果関係を正しく表現できるようになってきたと言えるような結果である。

「書きことば」と比較すると、「書きことば」のほうが接続詞の種類が多い。「だけど」「が」「じゃ」「それなのに」「だが」。やはり、4年、6年にふえている。一位はともに「(そう)して」であるが、「書きことば」では、「でも」「しかし」「だけど」「け(れ)ど(も)」などの逆接を多く使用している。そして、話しことばで、幼児に多く、小学生に少なくなっていた「そ

れで」が、「書きことば」では、10%以下といっそう少なくなっている。中でも6年はほとんど使っていない。「すると」が半分を占め、ついで「そうしたら」「そして」の順序なのである。しかし、傾向としては話しことばとちがわないのである。ただ、「書きことば」のほうがいっそう整っていると言える。

最後に、接続詞の逸脱的使用の例をあげておく。年中6からの例である。傍線の部分。(文献1でくわしく述べた)

例：ヒトガ ミズ ヤッテンノ。タイヨウガ テッテル。ソウシテネ [これは] ヒマワリミタイ。

例：コレハネ コドモ オカアサンガ アカチャント イトラ コドモガネー エートネー デテ キテネ アカチャン イタズラシタノ。ソレカラ [それで] アカチャンガ ナイタノ。

次のは間投詞的使用の例。

例：エトネー クマガ キテネ ネズミヲ ツカマエヨウト シタラ モウスコシタッタラネ ントー デネー ウサギト ブタネー クルマニ プツカッチャッタノ。

4 連体修飾語をどの程度使用しているか

文の接続関係は、一文内での単位文と単位文の結合をなす接続助詞と、文章内での文と文の連結をなす接続詞によって主としてなされている。これについては上で述べた。しかし、接続詞のうちには、指示代名詞派生のものであるように、前文の一部を指示する指示代名詞も、文と文の接続関係を表わす任務をもっている。しかし、それについてはこの論では述べない。

ここでは前文との関連を、単位文(単位文+単位文の並び構文、単位文を含有する挿入構文もある)をもつ連体修飾語を使用することによって、言いたい内容を、二文三文等で表現せず、複雑な一文で表現する仕方を用いる方法について述べる。年中6では、たったの5例、年中2は16例、2年は8例、4年は26例、6年は20例ほどある。

時刻とか場所とかの内容や状況を説明したり、もの、ひとの状態や行動を

表現しているのが多い。それら説明される時、場所、ものは、具体名詞でなく、「とき」「ところ」「もの」などという形式名詞が多い。また、連体修飾語の形式は、「目的語＋述語」であるものと、述語を表わす助動詞、形容詞一語による行為や性質を表わす単純な形式が幼児に多く、年齢を重ねるにしたがって複雑になり、主述の整った形式になってきている。使用数も多くなる。第四表のようである。表の傍線の部分が連体修飾語、点線の部分が被修飾語である。

文献1の場合は、絵本で読んだ話をさせたりしたので、おとなの作からの影響で、年長になると相当複雑な挿入文をもつ形式も出ていたが、今度は、絵を見て自分で創作しなければならなかったせいか、単純な形式しか出ていなかった。文献1の資料となった「幼児のことばカード集」の中から例をあげる。年中はやはり少ない。

例：ワルモノガ デテ キテ オド（カ）サレチャウ オハナシナノ。（年中）

例：イスガ ヒトリデ パッタンテ タオレチャッタ ユメ ミタリネ、ソノ コ
コアガネ ヒトリデニ コップニ ゴクゴクッテネ ツイデル コトモ ユメ
ミル。（年中）

例：～ビーッテ フィタラネ ソシタラネ コンドハネ ウーント フエフキト
イッシュヨニネ オナガ、オナガ ガワッテ イウネ トッテモ フカイネ ウ
ント ウキワガ アッテモ ウカバナイネ ウントネ カワニネ ツレテッテ
ネ（略）ハマベマデ キタノ。（年長）

例：～ソイデ ジュウエン イレルト シタガ ミエル ボウエンキョウ ミタ
ノ。（年長）

例：～ソレカラ「ミツカッタラ ゴメンヨ」ッテ イウネ オナマエ（ガ）ツイテ
ルネ ジドウシャノ サンケエトネー ウント ソレガ イチバン サイゴニ
デテ クルノ。（年長）

それでは、「書きことば」の例はどうだろうか。同じ絵を見て書かせた場合の例をあげておく。話しことばの場合よりいくらか複雑のようである。

時の例：あるはれた日のこと、男の子が二人で野球をしていると～（2年）

第四表 連体修飾語の例

年齢 問題	年 中 6	年 中 2	2 年
I の 例	○ <u>～</u> コノ オレテン ノニ ミズヲ ヤッダッテ ショウガナイ。	○カレテル オハナトネ ミズヲ グンデルへトネへ。 ○カレテナイネ オハナガ アルノ。	○オトコノコガ シボンデル ハナニ ミズヲ アゲマシタ。
II の 例		○コドモガ アカチャンノ トコロニ イッタラ～	
III の 例			○ <u>～</u> ネズミガ ハジッテ イルトキ トラックガ キタノデ ヒカレソウニ ナリマシタ。
IV の 例			○ <u>～</u> ナグクラ ホカノ ウチノ ガラス マドノ ガラスヲ ワッテ～ ○ <u>～</u> イタラ オトコノコノ ウツク ガマガ マドガラスニ アタッテ～

場所の例：あつというまに、ボールは、もう一人の少年の頭の上を通りぬけ、ガラスに当たってしまった。（4年）

ものの例：あきらくんがなげたボールがちかくの家のまどへあたって、〔のでの意か〕われてしまいました。（4年）

ひとの例：太陽に照らされ、かれかけていた花をみつけた人が、水をたくさんやると、みごとに元気になった。（6年）

理由の例：一人の男の子がボールを高くあげたため、一人の子はとることができません。（4年）くまはねずみをたすけるために車にぶつかってしまったので、くまはけがをしてしまいました。（6年）

この理由の例は、話しことばでは見られなかった。連体修飾語を使用するには、話す場でのゆとりのようなものが必要であるし、これら形式の教授・学習がなければならぬようである。話しことばに少なく、幼児に少なかっ

4 年	6 年
<p>○ウエキバチニ サイテル ハナガ ヒデリデ グツクリ シテイマシタ。</p> <p>○オツノ アツサデ ミズガ ナクテ カレソウニ ナッタ ハナガ〜テ〜ナリマシタ。</p>	<p>○サイショ ウエキバチニ ハイッテ イタ ハナガ ミズヲ〜</p> <p>○〜ソノ オレテイル ハナニミズヲ〜</p> <p>○〜オチントサマニ アテテ イタ ハナガ〜</p> <p>○〜モトノ ヨウナ キレイナ ハナガ サキマシタ。</p>
<p>○オトコノコハ アカチャンノ ネットイル トコロデ タイコロ〜ナラシマシタ。</p>	<p>○アル オトコノコガ アカチャンノ ネットイル ソバデ タイコロ タクマシタ。</p>
<p>○〜イテ ドウロニ デタ トタシ タルマニ〜シマイマシタ。</p> <p>○ネズミト クマガ オイカケッ コラ シテ イル トキニ ネズミガ〜シマイマシタ。</p>	<p>○クマガ ネズミヲ オッカケテ イル トキ ネズミハ トビタシテ イキ〜</p> <p>○クマト ネズミガ オイカケッ コラ シテ イル ウチニ シドウジャニ デタラ〜</p>
<p>○ヒトリノ コガ ナゲタ タマヲ ヒトリノ コガ ニラシテ〜</p> <p>○ソバニ アツク ウチノ ガラスヲ ワッチ〜</p> <p>○ソコノ ソバニ アツタ イエノ ガラスニ アタッテ〜</p>	<p>○〜ホウノ イエノ ヒトノ ガラス マダヲ ワッチ〜</p> <p>○スルト ソコニ アツタ イエノ ガラスニ ボールガ〜</p> <p>○〜ムコウノ イエニ アル ウチノ マドニ ボールガ〜</p>

たのは当然である。

4 まとめ

以上を幼児を中心にしてまとめてみると次のようになる。

- ① 幼児が二年保育の幼稚園に入園した当座は、年中6でもわかるように、絵を見て話すということにもなれていないので、未熟な不完全な文が多い。
- ② しかし、年度末(年中2)ともなると、未熟な文は少なくなる。そして、二つ以上の文で、接続助詞、接続詞を用いて話すとともに、文を切らないで、接続助詞を使用して一文で話をするようになる。したがって、「接続助詞+接続詞」を用いて文をつないで話すことも多くなる。文意識がつくのは、学校教育を受けてからのようである。それも4年からである。2年はまだ、幼児に近い。
- ③ 接続助詞の使用で言えることは、幼児は「て」を多用し、条件形として

は「たら」を用い、理由を述べる助詞としては、「から」を主として用いる。「けど」「のに」「ても」「が」などの逆接を用いることは少なく、「て」で代用したりする。「ので」は年中2から使用するようになるが、少なく、2年からやっと、「から」より「ので」のほうを使用するようになる。4年、6年では「から」は非常に少なく「ので」が多い。

- ④ 接続詞については、幼児は、理由や原因の結果を述べる「そしたら」「すると」が、小学生に比べると少なく、「そうして」「それから」「それで」を多用する。逆接の「けれど(も)」は用いず、「でも」も少ない。「ところが」「しかし」は用いない。
- ⑤ 年齢がすすむにしたがって、接続助詞、接続詞にかかわらず、文章語的語を使用する。接続助詞では、「(ず)に」「が」「中止形」、接続詞では「すると」「しかし」「ところが」。これら文章語については、幼児は全く用いていない。
- ⑥ 連体修飾語の使用を見ると、年中6は非常に少ない。年中2には、いくらか見られたが、2年も少なく、4年になるとふえてくる。しかし、「書きことば」に見られた「ため」という理由を説明する連体修飾語は見られない。挿入文をもつ形式も少ない。
- ⑦ 接続詞「そ(う)したら」「すると」、逆接の接続助詞「のに」「けれど」、連体修飾語の数が、幼児に少ないことなどを通して、幼児は、単位文と単位文、あるいは、文と文を論理的に簡潔に連結する能力が未熟であることが、小学生の段階も調査することによって、これまでも言われていることではあるが位置づけられたことは収穫であった。小学生になっても2年では不十分で、4年以上にならないといけないようだ。(機会があったら欠けている3年、5年にも同様な調査を試みたい。)つまり、話しことばから、文章を読むこと、文章を書くことへと指導されることによって、文意識もつき、はじめて文の接続関係能力が確実なものに育っていくのである。(大久保)

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目的・意義

電子計算機を使って、日本語のデータを処理しようとする、ことばや文字を扱わせる上で、解決すべきさまざまな問題が生じてくる。たとえば、日本語の活用現象の処理や、漢字の処理などは、その例である。また、電子計算機の高速性と大量処理の能力を利用して、日本語の諸性格を研究すると、従来の研究方法では、とらえられなかった研究課題が浮かびあがってくる。文字連続や音素連続の研究、語句の相互連続の研究、あるいは、用語の自動検索に基づく語彙や文法、文体等の研究などは、その例であり、国語研究における電子計算機の利用価値は、今後、ますます、高まってくることが予想される。しかし、上記のような問題を解決したり、課題を研究したりするためには、多くの基礎的な調査と方法論の確立が、まず必要である。

この研究の当面の目的は、こうした問題を研究していくための、基礎的な研究資料を作成し、それに基づいて、日本語の電子計算機処理の基礎理論（アルゴリズム）を検討するところにある。したがって、その成果は、国語資料の機械処理に理論的根拠を与え、各種の言語情報処理の進展にも役立つものとなる。

B 担当者

この研究は、言語計量研究部第一研究室の田中章夫（48. 7. 1. より外国出張）・中野洋・靄岡昭夫が担当し、言語計量研究部第二研究室の土屋信一（室長）・野村雅昭および同第三研究室の石綿敏雄（室長）・斎藤秀紀・米田正人の協力のもとに進められた。また、各研究室の岡田敏子・田島道子（旧姓武田）・白木千夏・堀江久美子・小高京子・沢村都喜江・下山いくよ（49. 6. 30退職）・竹内純子が研究作業を助けた。

C これまでの研究経過

電子計算機の導入以来、大量語彙調査の調査方式の検討・調査システムの開発のほか、「言語単位の自動分割」「言語データの機械処理法」「構文解析の自動化」「文字の連続確率（エントロピー）」「用語検索システムの開発」「言語情報処理のための言語分析」などの研究を行い、その成果は、『電子計算機による国語研究』（報告31）並びに、『電子計算機による国語研究Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ』（報告34・39・46・49・51）に公表してきた。また、その途中経過や中間結果は、部内報告『LDP』に随時発表している。

以上のほか、昭和48年度には、文部省の科学研究費補助金（試験研究費）による「電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究（研究代表者・岩淵悦太郎）」として、既製の用語索引12種および分類語彙表の入力データの作成を行い、近世および中古の言語資料5作品（『浮世風呂』『心中天網島』『浮世床』『今昔物語集巻26』『同巻30』）の文脈つき用語索引を作成した。

D 本年度の研究

新しい電子計算機（昨年度2月から稼働しているHITAC—8250と、本年度2月から稼働している高速漢字ラインプリンタ用機器NEAC—3200）を用いた新システムの開発と、旧システムの改良、および、これまでに作成した言語資料の分析が行われた。

本年度から始まった高校教科書の用語調査のための新しい語彙調査システムの開発が行われた。従来のシステムと大きく異なる点は語彙調査システムにKWICを導入したこと、および、高速漢字ラインプリンタを使用することである。

用語検索システムは従前よりも改良された。かな文出力、漢字かな混り文出力のいずれもが可能になった。また、検索単位は従来のS単位に加え、L単位、文節単位が増えた。漢字プリンタによる出力実験としては、これまで

の JEM—3800, S—5300 の二機種による出力実験に加え, C—5210 (2月から稼動) による出力が始まった。

これらの新しい機械を使ったシステムの研究として, 昨年度に続き「漢字プリンターを使用したターンアラウンドシステム II」(斎藤秀紀) が公表された。

次に, これまでの言語資料の分析については, 「言語情報処理のための言語分析」では「名詞・形容詞述語文の構造」「日本語の生成語彙論的記述と言語処理への応用」(以上石綿敏雄) が公表された。また, 「エントロピーの研究」関係のものとして, 「現代日本語における音素連続の実態(II)」(中野洋), 「文節タイプ連続の研究——「寒山拾得」のデータを使って——」(靄岡昭夫), 「 $\bar{}$ 文の長さ $\bar{}$ の統計学的一考察——時系列的解釈——」(米田正人) が公表された。また, 新聞語彙調査の資料を使ったものとして, 「新聞の用語と雑誌の用語」(石綿)「新聞における漢語のまぜ書き表記について」「同(付)漢語のまぜ書き表記一覧表」(以上土屋信一), 「四字漢語の構造」(野村雅昭) が公表された。

これらの調査研究は, いずれも, 本年度末に公刊された『電子計算機による国語研究(VII)』(報告54) に収められている。

E 今後の予定

来年度は, 継続研究の他, 高校教科書の用語調査に伴うシステムの開発・実験的研究が行われる。

また, 高速漢字ラインプリンタを用いる新しいシステムの開発を行う予定である。

(中野)

漱石・鷗外の用語の研究

A 目的・意義

この研究は、「電子計算機による言語処理に関する基礎的研究」の一環として開発した「索引作成と用語検索の処理システム」を実際に使用して、夏目漱石・森鷗外の作品の用語を分析するものである。ただし、当面は言語情報（原文および索引の磁気テープファイル）の蓄積と、処理システムの改良・拡張が中心となっている。

B 担当者

この研究は言語計量研究部第一研究室の田中章夫（48. 7. 1より外国出張）・中野 洋・齋岡昭夫が担当し、同第三研究室の石綿敏雄（室長）・斎藤秀紀・米田正人の協力のもとに進められた。また、両研究室の岡田敏子・堀江久美子・小高京子・沢村都喜江・下山いくよ（48. 6. 30退職）・竹内純子がこの研究を助けた。

C これまでの研究経過

46年度までに開発されたKWICシステム（第一システム）を使用して、漱石の『三四郎』『硝子戸の中』『行人』，鷗外の『高瀬舟』のプレエディット（単位切り・清書・付加情報付け等の前処理）・漢テレ入力および索引作成のオペレートを実施し、索引ファイル（磁気テープ）を作成した。また、これらについては全文かたかなのKWIC索引を出力した。さらに鷗外の『青年』のプレエディットと漢テレ入力が完了した。

一方、高速漢字プリンタを用いる類別用語検索システム（第二システム）が始動し、鷗外の『寒山拾得』『雁』のオペレートが終了し、索引ファイルが完成した。この2作品については漢字プリンタによる漢字かなまじりKW

ICを外注により出力した。また、漱石の『坊っちゃん』『草枕』、鷗外の『山椒大夫』のプレエディットが終わり、漢テレ入力が始まった。さらに、鷗外の『渋江抽斎』のプレエディットも開始された。

D 本年度の研究

第一システムにより『青年』の索引ファイルを完成させ、全文かたかなのKWIC索引を出力した。

第二システムでは、前年度までに完成した『寒山拾得』『雁』の再校正、『山椒大夫』のオペレートが終了した。また、『草枕』『渋江抽斎』の漢テレ入力が終わり、『坊っちゃん』とともにオペレートが行われている。さらに、漱石の『ころも』のプレエディットが開始された。

なお、今年度末から当研究所に漢字プリンタが導入され、第二システムの各索引はもちろん、第一システムのものもすべて漢字かなまじりKWICで出力することが可能となった。

E 今後の予定

上述のように索引ファイルの磁気テープが蓄積されつつあるが、予定されたファイルの完成を急ぐとともに、これらのファイルをもとにして、漱石・鷗外の用語の研究を、語法・表記法・語彙分布・音素連続・文節連続その他さまざまな面から行う。それらのうちの多くの部分は、すでに開発済みの自動分析システムにより行われる予定である。

以上の研究を行うのには漢字かな交りの索引を用いる必要性が高いため、第一システムにより全文かたかなで出力されているKWIC索引も、今般導入された漢字プリンタで逐次再出力する方針である。

なお、いったん完成した索引に、修正を重ねて精度をよりいっそう高める作業もたえず続けられることになっている。

(窮岡)

新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究

A 目的・意義

国語の正書法を確立する上に役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

B 担当者

調査研究の担当者は、土屋信一（室長）・野村雅昭であり、田島道子（旧姓武田）・白木千夏が作業を助けた。

C これまでの経過

これは、言語計量研究部の第一研究室と第三研究室が進めてきた「電子計算機による新聞の語彙調査」によって作成されたデータに、機械および人手による処理を施し、各種漢字表、表記表を作成し、その分析・記述を行うものである。研究は漢字と表記の二面から進めており、前者は野村が、後者は土屋が分担している。漢字に関する研究では、これまでに全体の3分の1のデータ量に当たる「1紙1年分」の層別漢字表と、1紙朝刊前半分長単位用語例表とを作成し、前者をもとに、中間集計の結果を、『現代新聞の漢字調査(中間報告)』(資料集8)として刊行した。引き続き、3紙1年分の全データから用語例台帳を作成し、それを短単位に分割し、語種の判定、読みがなづけなどを行ったのちカード化し、五十音順に配列し、漢字表記語台帳を作成した。さらに、それからおのおの漢字について、各種の情報を記入したカードを作成し、分類・整理し、各漢字ごとに、音訓・用法別に用語例・表記形・層別度数などを記入して、漢字表台帳を作成した。また、表記に関する研究は、主として仮名表記の集計と分析・記述を目的とし、3紙1年分の長単位データ・ファイルから、漢字を含まない長単位語のみを取り出した、

仮名表記語集計表と、漢字を含む長単位語を取り出した、漢字表記語集計表を作成した。また、同表記異語の判別に役立てるため、原文データを整え、任意の長単位語を文脈・出典情報付きで漢字テレタイプで印字するK W I Cシステムを設計し、延べ約2万語の長単位語につき、文脈付きの用例表を作成した。

D 本年度の作業

1 漢字に関する研究

(1) 漢字表台帳の作成

前年度にしのかした、漢字カードの内容を台帳に転記する作業の一部を終了させた。

(2) 電子計算機への再入力

漢字表台帳の内容を電子計算機に再入力するために、台帳の内容をコード化して、カード・パンチ用原稿を作成した。パンチ作業は、外注によって行った。データ・カードの枚数は、約12,000であった。

(3) 電子計算機による処理

データ・カードを入力し、各種の分析用集計を行うために、処理システムの設計・プログラミング・オペレーターの各作業を行った。基本システムのプログラミングは、外部に委託した。システムは、つぎの二つに大別される。

(i) 漢字調査集計用マスターファイル作成システム

(ii) 漢字調査本集計システム

計算機処理によって作成した、各種漢字表および分析用の集計表は、つぎのようなものである。

- 全体五十音順度数表
- 全体使用率順度数表
- 層別使用率順度数表（I～VI層）
- 総合用法別表
- 類別用法別表（7種）

- 品詞別表（6種）
- 使用度数分布表（3種）
- 字種別集計表
- 音訓内容別集計表
- 用法別集計表
- 層別出現分布表

なお、集計によって得られた、標本としての漢字数は、以下のとおりである。

異なり 3,213字 延べ 991,375字

(4) 報告書原稿の作成

以上のデータをもとに、報告書原稿作成のための、作表・分析・執筆を行い、ほぼ終了した。これによって、「漢字に関する研究」は、本年度で実質的な作業を終えた。

(5) 新聞使用漢字の分析

漢字によって表記される言語単位が、新聞に出現した単位語の中で、どのような順序で結合しているのか、また、その結合にはどのような構文的・意味的關係がみられるかをしらべるために、本年度は、四字漢語を対象として、その分析を行った。その詳細については、下記の論文に発表した。

野村雅昭「四字漢語の構造」（『電子計算機による国語研究VII』〈報告54所収〉）

2 表記に関する研究

表記に関する研究は、当初は短単位語を対象とする予定で、そのために短単位語表記一覧表の作成を進めてきた。しかし、新聞の語彙調査が、3紙1年分の全データに対しては、48年度に長単位処理の段階までで一応終結したので、短単位ファイルから語表記一覧表を作成する方法は断念し、代わりに長単位ファイルから、各長単位語ごとにまとめて層別の内訳と出典（新聞名とブロック番号）を示した集計表を作成し、人手によって単位を切り、語種そ

の他の判定を行い、カード化して、短単位語表記表を作成することとした。計算機による集計表の作成は前年度までに済んでいたもので、本年度は、次の作業を人手によって行った。

1. β 単位に切って、集計表に書きこむ。
2. 語種の判定（語数の少ないもののみ）をし、集計表に書きこむ。
3. 集計表から、片仮名を含む β 単位語、まぜ書き語、ふり仮名付きの語のカードを作成した。
4. このうち、まぜ書き語についての集計を行い、異なり379語、延べ1921語を得、その分析結果を以下にまとめた。

土屋信一「新聞における漢語のまぜ書き表記について」

付. 漢語のまぜ書き表記一覧表

（『電子計算機による国語研究VII』〈報告54所収〉）

なお、土屋論文の第2章は、表記の集計・分析システム全体に関する記述である。

E 今後の予定

1. 漢字に関する研究

原稿の執筆を終え、報告書を刊行する予定である。それをもって、この研究は、完了する。

2. 表記に関する研究

50年度は、片仮名の用法の分析・ふり仮名の用法の分析・漢語の仮名書きの分析および記述に進む予定である。

（土屋）

高校教科書の用語調査

A 目 的

現代日本語の用語用字の実態を明らかにするために、これまで、新聞、雑誌九十種、総合雑誌、婦人雑誌を対象として調査を重ねてきた。以上の諸調査のあとを受けて、国民が一般教養として、各分野の専門知識を身につける時に必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として、高校教科書について用語用字の実態を調査する。

B 担 当 者

言語計量研究部に属する三研究室が共同でこれに当たり、これに属する全員がその作業を分担した。すなわち、担当者は、部長の齋賀秀夫のほか第一研究室の田中章夫（48.7.1より外国出張）、中野洋、靄岡昭夫、第二研究室の土屋信一、野村雅昭、第三研究室の石綿敏雄、齋藤秀紀、米田正人であり、各室の岡田敏子、田島道子、白木千夏、堀江久美子、小高京子、沢村都喜江、竹内純子がこれを助けた。

C 本年度の研究作業

この調査研究は昭和49年度から始めた。本年度の研究作業は、

- (1) 調査対象の選定……高校の社会科、理科の教科書9冊を対象として選定した。すなわち、政治経済、倫理社会、地理B、世界史、日本史、生物I、化学I、物理I、地学Iである。範囲を社会科、理科に限ったのは、説明文を調査対象にするためである。
- (2) 調査項目の決定……用語用字の実態調査の出力として用語表、用字表の種類を検討、分析項目を定めた。
- (3) 調査単位の決定……文節から助詞を切り出す（終止・連体形以外につく

ものは切らない) W単位に, 形態素に近いM単位の二種を選定した。

- (4) 処理過程の決定……人手作業と機械処理のそれぞれ, およびその組み合わせ方について検討, 全体の計画を策定した。

処理過程は, 以下の通りである。台帳作成・管理, 文情報の記入, 単位切り・検査, 清書・検査, データさん孔, 原文の機械読みこみ, 出力・校正, 修正, 再読みこみ処理(通し番号など), ミニKWIC作成, 出力, 校正, 修正, (最終ファイル), 比率計算, 語彙表作成, 文脈つきKWIC作成出力, 文字集計, 漢字表出力, 文字KWIC作成出力など。

- (5) 作業の実施……上記(4)の過程に従い, 台帳作成, 単位切り, さん孔のための清書, 情報の記入, さん孔を開始, 政治経済についてはさん孔作業を完了した。機械処理プログラムは, システム・アナリシスを行った。

D 今後の予定

上記C(4)の予定に従い, C(5)作業を継続し, 5年で完了の予定。

(石綿)

日本語教育のための内容と方法に関する 基礎的研究

A 目 的

日本語を外国人に学習させるための基礎となる日本語そのものに関する研究と学習者の母語別，学習目的別を考慮した日本語教育の内容・方法に関する研究とについて将来の調査研究作業が円滑に押しすすめられるよう基礎的な路線を敷くのが目的である。

B 担 当 者

日本語教育研究室は昭和49年4月11日に発足し，同日付発令になった，水谷修（室長），高田誠の両名がこの研究に当たった。なお，下記3の目録作成には，非常勤職員日向茂男が協力した。

C 本年度の作業

1. 既存研究成果調査

以下の a. b. c. の三つの範囲のものについて，今までに発表，刊行された研究報告，研究書，参考文献，教科書以外の教材（視聴覚教材を含む）をできるだけ多く収集，整備し，内容にも検討を加えることを計画した。

- a. 日本語以外の言語を母語とするものに対する日本語の教育に関するもの
- b. 各国における異言語使用者に対する自国語の教育に関するもの
- c. 言語，とくに日本語に関する比較対照的研究に関するもの

本年度は a. b. c. の三項のうち，aの「外国人への日本語教育に関するもの」にもっとも力をそそぎ，日本語教科書については，市販されているもののうちほぼ半分を収集，整備した。b項，c項については文献リスト用カードの採集がいくらか進んだが，文献等の現物を収集することはあまりでき

なかった。

2. 日本語教育の現状（内容と方法）についての実態調査

国内の教育機関については直接訪問し、授業の参観、担当者との面接等によって、また海外の機関についてはアンケート等により日本語教育の実際における内容と方法の実態を把握しようとしたものである。

本年度においては国内機関の直接訪問のみを実施し、東京地区で東京外国語大学附属日本語学校ほか5機関、関西地区でカナディアンアカデミーほか11機関をたずねた。

3. 日本語教育に従事しようとするものための必読書目録作成

日本語教育に従事しようとする人たちにとって必要と思われる基本的な参考文献一覧をつくり、内容の簡単な紹介など解題をつけた目録を作成するものである。

本年度は、日本語教育学会機関誌『外国人のための日本語教育』(1号～26号)、早稲田大学語学教育研究所『講座日本語教育』(1号～10号)を中心として、参考文献の採取を行い、カード化する作業を進めた。年度末現在略750枚のカード作成を終えた。

4. 日本語を外国語として学ぶ場合のことばに関する問題点の収集整理

このプロジェクトに関しては本年度は未着手のままであった。

D 今後の予定

昭和50年度には、下記の題目のもとに研究調査をすすめる。1. は新規に研究を開始するものであり、2. 3. は49年度の継続である。

1. 日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究
2. 日本語教育に関する既存の研究成果の調査研究
3. 日本語教育の現状（内容と方法）についての実態調査

(水谷)

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

国語に関する学問の研究成果一般を知り、あわせて関係学界の動向や言語および言語生活に関する世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和49年1月から12月までに刊行された図書・雑誌・新聞について、その期間内に発表された文献の調査を行った。これらの文献の目録は、その他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和50年版）に掲載されている。

以下、文献を内容によって分類したうえ、冊数または点数を示し、大まかな傾向を知る手がかりとする。（ ）内に前年の数を示し、今年の場合と比較できるようにした。

外国発行の刊行書・雑誌については、その採録範囲を日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

なお、前年までの刊行書および雑誌論文における「日本語の研究と教育」の項目は、今回から「外国人に対する日本語教育」と改めた。

以上の調査および国語年鑑の編集は、次のものが担当した。

伊藤 菊子 田原 圭子 中曾根 仁

I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・判型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、『納本週報』（国立国会図書館）、その他の目録から情報を補い、総数 809 冊についての分類目録を作成した。

刊行書の分類とその冊数

国語(学)	29 (51)	音声・音韻	5 (6)
国語史	49 (42)	文字・表記	27 (16)

語彙・用語	
語彙・用語	9 (24)
人名・地名	1 (3)
文 法	
文章・文体	5 (6)
方言・民俗	93 (83)
ことばと機械	
4 (5)	
コミュニケーション	
コミュニケーション一般 (言語生活)	13 (21)
言語技術 (話し方・書き方)	30 (20)
マス・コミュニケーション	
4 (6)	
国語問題	
2 (5)	
国語教育	
国語教育一般	16 (8)
学習指導	8 (10)
ことばの指導	0 (0)
文字教育	3 (3)
語彙・文法教育	2 (4)
聞く・話す	2 (0)
読む・読書指導	7 (14)
書く・作文指導	6 (10)
文学教育	0 (2)
古典教育	0 (0)
漢文教育	0 (0)
特殊教育	5 (6)
学力調査	0 (2)
国語教科書・その他	4 (10)
幼児の言語発達	6 (8)

外国人に対する日本語教育	
7 (8)	
言語学その他	
59 (46)	
辞典・用語集	
辞典・用語集一般	0 (1)
国語辞典	17 (7)
用語辞典・用語集	20 (24)
特殊辞典	23 (14)
索引	25 (18)
資 料	
資料	23 (16)
史料	18 (17)
解題・目録	19 (16)
年鑑	14 (11)
計 575 (564)冊	

追 補	
国語学その他	9 (13)
国語史	13 (6)
音声・音韻	1 (2)
文字・表記	4 (5)
語彙・文法	8 (4)
文章・文体	0 (3)
方言・民俗	78 (48)
ことばと機械	2 (1)
コミュニケーション	12 (10)
マス・コミュニケーション	4 (1)
国語問題	0 (1)
国語教育	18 (16)
外国人に対する日本語教育	17 (9)
言語学その他	34 (19)
辞典・索引・資料	34 (20)
総計 809 (722)冊	

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては『雑誌記事索引』（国立国会図書館）の人文・社会編，『LLBA』（Language and Language Behavior Abstracts），その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，2,543点に達した。（連載物については，各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた。）

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数（目録から採録した分は含まない。）

a 一般刊行雑誌（学会誌を含む）……372（350）種

国語・国文・言語ほか	131(133)	週刊誌・総合誌	1(1)
方言・民俗	17(15)	文芸・詩歌・芸能	4(6)
国語問題	6(9)	その他(教育・社会学・	
国語教育	23(23)	心理学ほか)	77(73)
日本語教育	4(3)	臨時に入った雑誌	29(15)
マス・コミ関係	10(12)	外国誌	56(50)
外国語	14(10)		

b 大学・研究所等の紀要・報告類……263（256）種

2 論文・記事の分類とその点数

国語(学)		音声・音韻一般	35(43)
国語(学)一般	181(145)	史的研究	21(22)
時評・随筆	50(78)	アクセント・	
国語史		イントネーション	11(13)
国語史一般	31(56)	文字・表記	
訓点資料関係	10(10)	文字・字体	33(18)
音声・音韻		表記	34(24)

語彙・用語

語彙・用語一般	97(116)
古語	49 (36)
現代語	19 (24)
新語・流行語	4 (2)
外来語	7 (4)
人名・地名	14 (13)
辞書・索引	22 (26)

文 法

文法上の諸問題 (現代語法)	67 (53)
史的研究	39 (44)
敬語法	15 (9)

文章・文体

文章・表現一般	17 (35)
史的研究	64 (43)

古典の注釈

注釈一般	33 (2)
上古	17 (6)
中古	15 (17)
中世	6 (4)
近世以降	3 (9)

方言・民俗

方言一般	39 (38)
各地の方言	
東部	35 (54)
西部	66 (25)
九州・沖縄	18 (31)
民俗	22 (4)

ことばと機械

言語情報処理	18 (20)
研究用機器	4 (3)

コミュニケーション

コミュニケーション一般	63 (69)
言語生活	30 (71)
言語活動	
言語活動一般	21 (0)
書く・読む	27 (38)
話す・聞く	6 (10)

マス・コミュニケーション

一般の問題	6 (6)
新聞	1 (9)
放送	34 (52)
広告・宣伝	1 (9)
印刷・出版	0 (22)

国語問題

国語問題一般	33 (64)
表記法	18 (19)

国語教育

国語教育一般	100(127)
国語教育史	4 (9)
学習指導	86 (45)
ことばの指導	5 (20)
文字・表記教育	7 (19)
語彙教育	18 (10)
文法教育	2 (18)
聞く・話す	4 (21)
読む・書く	
読む・書く一般	23 (13)
読解指導	30 (21)
読書指導	46 (39)
作文指導	49 (59)
文学教育	4 (18)
古典教育	6 (12)
漢文教育	9 (9)

特殊教育	19 (17)
学力評価	3 (2)
国語教科書・教材研究	11 (44)
幼児の言語発達	24 (30)

外国人に対する日本語教育

73 (93)

言語(学)

言語一般	104(134)
意味	9 (4)
比較研究	24 (14)
翻訳の問題	22 (48)
外国語研究	22 (9)
外国語教育(学習)	34 (34)
各国の言語問題(教育)	5 (26)
言語障害研究	30 (38)

資料

資料一般	21 (6)
国語資料	14 (12)
翻刻	28 (25)
目録	7 (10)

書評・紹介

国語(学) その他	23 (22)
音声・音韻	11 (3)
文字・表記	0 (0)
語彙・用語	5 (20)
文法	13 (9)
文章・文体	2 (1)
方言・民俗	3 (6)

ことばと機械	0 (1)
コミュニケーション	11 (1)
マス・コミュニケーション	0 (0)
国語問題	1 (2)
国語教育	15 (14)
外国人に対する日本語教育	2 (2)
言語(学) その他	26 (34)

計 2,291 (2,497) 点

追 補

国語(学) その他	9 (36)
国語史	3 (24)
音声・音韻	22 (12)
文字・表記	5 (15)
語彙・用語	20 (36)
文法	30 (29)
文章・文体	13 (14)
古典の注釈	5 (5)
方言・民俗	15 (63)
ことばと機械	1 (2)
コミュニケーション	6 (11)
マス・コミュニケーション	1 (1)
国語問題	3 (4)
国語教育	43 (29)
外国人に対する日本語教育	3 (1)
言語(学) その他	59(118)
資料	9 (9)
書評・紹介	5 (18)

総計 2,543 (2,924) 点

III 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として、保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は1,944点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		西日本	132(111)
朝日	301(213)	週刊・その他	
(大阪)*	2(0)	日本読書新聞	20(30)
毎日	248(160)	週刊読書人	43(55)
読売	222(158)	図書新聞	31(34)
(大阪)*	0(1)	新聞協会報	38(61)
東京	388(117)	教育学術新聞	7(13)
サンケイ	198(116)	その他	27(48)
日本経済	146(83)		
北海道	141(110)		
		計	1,944(1,867)点

* (大阪) は、大阪版であって、関係者のご好意により送られたものである。

2 月別の切り抜き点数

1月 135(151)	2月 159(137)	3月 176(165)
4月 171(191)	5月 177(177)	6月 190(221)
7月 145(123)	8月 111(157)	9月 148(125)
10月 171(184)	11月 183(111)	12月 178(125)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	171(178)	問題語・命名	45(69)
音声・音韻	23(17)	人名・地名	35(28)
文字		文法	3(0)
文字・表記	18(16)	文体	
活字	7(12)	文体・表現	23(41)
語彙		方言	
語彙一般	135(39)	方言一般	30(27)
各種用語	33(20)	方言と標準語	5(7)
新語・流行語・隠語	55(60)	各地の方言	16(22)
外国語・外来語	144(29)	言語生活	
辞書	40(40)	言語生活一般	67(64)

ことばの問題	46 (24)	話す (聞く)	2 (5)
ことばづかひの問題	17 (20)	読む (読書指導)	16 (12)
敬語の問題	15 (25)	書く (作文指導)	6 (18)
言語活動		文学・古典教育	1 (2)
言語活動一般	8 (11)	特殊教育	21 (28)
話すこと (聞くこと)	30 (28)	視聴覚教育	1 (9)
書くこと (読むこと)	14 (17)	学力テスト	2 (2)
読書	32 (37)	幼児語教育	20 (23)
ことばと機械	16 (23)	言語学	
国語問題		言語一般	43 (58)
国語問題一般	13 (55)	外国語一般	51 (32)
表記の問題		比較研究	18 (25)
表記一般	22 (35)	翻訳の問題	49 (36)
当用漢字など	61 (51)	外国語教育	50 (60)
かなづかひ	2 (3)	外国語に関する紹介 ^{ほか}	23 (39)
送りがな	2 (22)	日本語の研究と教育	102 (68)
かな書き	4 (8)	マス・コミュニケーション	
横書き・縦書き	1 (2)	マス・コミ一般	19 (44)
人名・地名の表記	14 (23)	新聞	9 (16)
外来語表記	6 (8)	放送	43 (32)
ローマ字	5 (1)	広告・宣伝	50 (45)
国語教育		出版	50 (58)
国語教育一般	35 (43)	書評・紹介^{ほか}	157(148)
学習指導の問題			
学習指導一般	18 (2)		
		計	1,944 (1,867) 点

切り抜き点数は、昨年より70点あまり多かった (くわしくは『国語年鑑』<50年版>に掲載)。分類項目別の点数で「語彙一般」と「外国語・外来語」がきわだって多くなっているのは、『東京新聞』の夕刊に、連載のコラム欄があり、主として、上記2項目に分類されたことによる。新聞の種類別の点数で『東京新聞』の点数が多いのもそのためである。「日本語の教育と研究」の項目も昨年の倍ほどあり、例年に比しても点数が多かったが、これ

は、「教育・学術・文化における国際交流について」中央教育審議会から答申が出され、その関連記事が各紙に掲載されたことや、日本学研究者の紹介の連載記事があったり、「国際交流文化会議」をはじめ、日米間にも教育や文化についてのいくつかの会議があり、それらのなかで日本語教育に関連した記事が切り抜かれたことによる。「国語問題」に関する記事は、どの項目も昨年より少なかったが、「当用漢字など」に関してのみ昨年より多かったのは、11月に第11期国語審議会の最終総会が開かれ、「当用漢字の改善について」の報告が出されたことによる。

〔付〕 所外からの質問について

昭和49年度に電話で受けた質問件数を示すと次のとおりである。

計	月	49年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	50年	2月	3月
	4月	4月									1月		
792	54	66	64	70	49	73	75	76	56	72	71	66	

(前年度の質問件数は 832 件であった)

質問の内容は、例年どおり多方面にわたっていたが、件数の多かったものを示すと次のとおりである。

用字用語について174件(用語一般64件, 同音類義語47件, 用字一般32件)あり, 例年どおり多かった。同音類義語のなかでは, 初める・始める, 計る・図る・測る・量るの使い分けについてなどがめだっていた。漢字の読み91件, このなかでは姓名に関してが28件と相変わらず件数が多かった。送りがな49件, 国語一般44件, 字体38件(吉・吉, 戻る・戻るなど), かなづかい29件, 方言26件, 語源23件, 敬語20件, そのほか, 研究所および研究所の刊行物についての照会が78件あった。電話の質問のほかには, はがき・封書による質問が15通(海外からの3通を含む), 直接来所しての質問が10件ほどあった。

以上の件数は, すべて質問の係をとったもので, 所員が個人的に受けた質問は含んでいない。

(田原・中曽根)

科学研究費補助金による研究

大都市における言語生活の実態調査（代表 野元菊雄）（総合研究A）

＜研究目的＞

戦後、地域社会における言語生活の実態調査は、国立国語研究所の実施したものを始めとして、いくつかあり、大きな成果を得ている。しかし、この調査はまだ大都市において実施されたことはなかった。一方、ここ数年の社会変動は著しい。いわゆる地方での過疎現象とそれを裏返した都市における過密現象である。すなわち、大都市への人口集中によって、大都市の全国に対するウエイトは著しく増大した。そこで、一般的な地域社会としての大都市における言語生活、および方言社会から方言を持ってその大都市に来て生活を始めた人々の言語生活の実態を知る必要性はますます高まった。この調査は、これを知ることによって、共通語あるいは標準語はどう変わるかを推測し、それに対処する効果的な言語教育の施策立案の学問的根拠を得ることを目的とする。

今まで、大都市における言語生活が真の意味で研究されなかったのは、その調査が、被調査者が捉えにくいなどの理由で種々の困難があらうと予想されたからである。しかし、社会学を初めとして、他の学問分野では大都市住民の調査が始まっている。これらの分野でも困難は同様であろうが、今やこの困難故の逡巡を許されない必要性が痛感されるに至ったのであろう。言語の分野でも今や調査に着手すべき時が来たと思われる。この調査は初めてのことでいろいろの方法論上の進展が実施の過程で予想される。この大都市における言語の実態研究についての方法論確立もこの調査の大きな目的である。

＜調査の組織＞

言語班として本研究所のほかには東京外国語大学・筑波大学・岩手大学の研究者、社会班として本研究所のほかには東京大学新聞研究所・東京都立大学の

研究者、統計班として統計数理研究所の研究者が参加した。そのほか、調査の実施に当たっては、広島大学・大阪教育大学・大阪樟蔭女子大学・四国女子大学の研究者も参加し、その他諸大学の学生の協力を得た。

＜実施の概要および実施についての考察＞

東京の調査は昭和49年11～12月に実施した。無作為二段抽出法によってまず、東京23区内から町を50抽出し、それぞれの町から被調査者個人を20人抽出した。したがって被調査者は1,000人であった。これらの被調査者に依頼状を郵送する際、「言語生活調査票」を送附し、記入を求めた。次いで調査員が訪問し、面接調査をするとともに、留置きされていた調査票を回収した。

東京調査の実施数は次のとおりである。

- ・面接調査済み：673（不完全なもの9を含む）
- ・言語生活調査票回収：660
- ・両調査とも実施したもの：641

大阪の調査は昭和50年2月に実施した。ほぼ東京の場合と同様であるが、被調査者は20の町から各25人、したがって合計500人で、東京の場合の半分である。

大阪調査の実施数は次のとおりである。

- ・面接調査済み：357（不完全なもの1を含む）
- ・言語生活調査票回収：370
- ・両調査とも実施したもの：356

完全なものの回収率は、東京で64.1%、大阪で71.2%であった。この率は国立国語研究所の今まで実施してきた、地方中小都市における社会言語学的調査の実施率と比べると低い。その理由はやはり大都市の調査のやりにくさの故であろう。不在率が高く、協力的態度がやや低く、また名簿の不備などがここで指摘される。

東京と大阪との差については次のようないろいろの原因が考えられる。

1. まとめていえば、両都市間の大都市性が濃いか淡いかの差である。

2. 以下詳しく見ると、大阪は東京に比べて一人暮らしの若い人が少ない。これらは不在率が高い。
 3. 両都市間の面積の差から、大阪の方が帰宅時間が早くしたがって捕捉しやすかった。
 4. 大阪では東京の結果によって、詳しい説明書と、依頼状を同封して理解を求めたことが効果をあらわした。
 5. 大阪調査の際は新聞・テレビなど、マス・コミを通じて調査の宣伝をした。東京ではこの努力はまったくしなかった。
 6. 東京調査は年末に近かったので、特に商店などでは拒否が多くなった。
 7. 東京では会計上の決まりで、調査員が泊まり込みで調査に当たれなかったために、情報交換もできず、臨機の機動力に欠けるところがあった。これは今後の問題点であろう。
- 調査結果は現在集計中である。

(野元)

作品の用語検索組織の研究(代表 石綿敏雄)(一般研究B)

<研究目的>

ことばの研究に電子計算機を利用する分野では、従来用例つきの用語総索引を作成することが行われ、われわれ自身もそれを行ってきた。しかしこの分野ではまだ用語の検索を十分に考えたシステムは作られていない。この研究はこのシステムの開発を目的としている。

1. 各種語彙表(類義語表, 同音語表, 時代別表その他)の作成システムの開発。
2. 用途に応じて任意の資料を引き出すシステムの検討と作成。
3. 情報を付加してデータを蓄積し, 索引を更新する。
4. 上記の研究を進めるために必要な, 新しい索引の試作。

<実施の概要>

1. 入出力機器のハードウェア面からの検討。

2. 検索の用途からみたシステムの検討。

3. 検索システムの設計とプログラミング。

上記1, 2の結果をふまえて、その目的をみたま、効率のよい用語検索組織を開発することを目的として、プログラムを設計し、一部を試作した。

4. 用語総索引の試作。

上記の実験を行い、その効果をたしかめ、次年度における修正、機能の増加をはかるために、いくつかの言語作品について用語総索引の作成を行った。作品としては

森 鷗外「青年」（語数約8万）

山田美妙「武蔵野」（語数約1万）

坪内逍遙「当世書生氣質」（十回まで、語数約5万）

（石綿）

現代の国語表記におよぼした洋学漢学の影響（代表 斎賀秀夫）（一般研究C）

<研究目的>

現代の国語表記の成立過程と変遷の要因を探るため、下記の表記の体裁面を中心に洋学資料と漢籍の表記法を比較調査する。

1. 句点・読点の使い分けの成立過程
2. 会話文の表示法や補助符号（?!など）の用法
3. 段落表示（一字下げなど）の成立過程
4. 人名・地名・物名・官名などの表示法の変遷

以上の研究によって、洋学・漢学が国語表記におよぼした影響を明らかにする。

<実施の概要>

1. 調査票の作成

江戸末期から明治時代にかけての表記を調査するために必要な事項とそれに関連のある事項を決定し、調査票を作成した。

2. 調査の実施

調査は三回実施した。第一回は福井県立大野高校所蔵の旧大野藩所蔵本を、福井大学学生三名の協力をえて実施した。昭和49年12月16～18日の三日間。調査文献180冊。英学資料とくに翻訳物を調査した。第二回は市立米沢図書館蔵興譲館文庫本を、山形大学学生八名の協力をえて実施した。昭和49年12月19～21日、24～28日の計八日間。調査文献308冊。洋学資料とくに国防・医学・法律関係の文献（オランダ関係）を調査した。

第三回は鹿児島大学附属図書館所蔵の玉里文庫本を、鹿児島大学学生十一名の協力をえて実施した。昭和50年3月11～14日、17～20日の計八日間。調査文献435冊。洋学資料のほか、漢籍・写本類を調査した。以上の調査にあたっては、上記各図書館ならびに次の方々に特にお世話になった。

福井大学教授 佐藤 茂氏。

山形大学助教授 小島俊夫氏。 同講師 湯沢質幸氏。

鹿児島大学教授 藪手重則氏。 同助教授 伊牟田経久氏。

(飛田)

日本語教育に関する事業

I 日本語教育研修企画協議会

日本語教育研修の事業は、昭和49年度に新たに設けられた日本語教育部に課せられた任務の一つであって、その当面のまた将来にわたっての実行については、最も有効な方針を立てる必要がある。そのため、日本語教育関係団体、特に研修を行っている機関の代表者、日本語教育の専門家、その他学識経験者を委嘱して、協議会を設け、(1)「日本語教育研修の在り方について」(2)「日本語教育部の行う研修の形態と内容について」の二点を主な協議題として、日本語教育部の研修に関する各方面からの助言を求めた。

委員には、次の方々を委嘱した。

浅野鶴子、木村宗男、日下部文夫、小出詞子、小堀郁夫、斎藤修一、椎名和男、鈴木忍、高橋一夫、吉田弥寿夫、石田正一郎

第1回会合

日時 昭和49年12月19日（木）午後2時～5時

場所 文化庁第1会議室

第2回会合

日時 昭和50年1月27日（月）午後2時～5時

場所 私学会館会議室

第3回会合

日時 昭和50年3月26日（水）午後3時～5時

場所 如水会館（第1談話室）

II 昭和49年度日本語教育研修会

昭和49年度日本語教育研修会は、文化庁との共同主催で、外国人のための日本語教育学会の協力を得て、初心者研修を東京及び大阪で、現職者研修を

大阪で開催した。

実施内容及び参加状況

1 初心者研修

(1) 東京

ア 会場	国立教育会館
イ 日時	昭和49年7月15日(月) ～7月19日(金)
ウ 内容	(講義題目・講師)
	日本語教育の概観 木村宗男
	日本語教授法 斎藤修一
	音声と音声教育Ⅰ 水谷 修 佐久間勝彦
	Ⅱ 大坪一夫 今田滋子
	Ⅲ 土岐 哲 朴 炯仁
	文字と文字教育 高橋一夫
	文法と文法教育
	一 概説一 寺村秀夫
	一 補助動詞一 森田良行
	一 助詞一 鈴木 忍
	語いと語い教育 西尾寅弥
	視聴覚教育
	一 日本語教育映画その他一 川瀬生郎
	テスト 伊藤芳照
	質疑応答 池尾スミ 藤田昌信
	懇談会 佐久間勝彦 室谷昭子 河原崎幹夫 西 芳絵
エ 参加状況	
申込者	217名
参加者	100名

修了証書交付者 87名

(2) 大阪

ア 会場	大阪府中小企業文化会館
イ 日時	昭和49年8月20日(火) ～8月24日(土)
ウ 内容	(講義題目・講師)
	日本語教育の概観 吉田弥寿夫
	日本語教授法 斎藤修一
	文法と文法教育
	一 概説一 寺村秀夫
	一 助詞・助動詞一 吉田金彦
	文字と文字教育
	一 概説一 広浜文雄 高橋哲也
	待遇表現 新井栄蔵
	語いと語い教育 玉村文郎
	音声と音声教育
	一 概説一 杉藤美代子 水谷 修 大坪一夫 倉谷直臣
	視聴覚教育 倉谷直臣
	テスト 新井栄治 山口幸二 春名万紀子
	質疑応答 吉田弥寿夫 大倉美和子 岡田英機
	懇談会 玉村文郎 吉田弥寿夫
エ 参加状況	
申込者	115名
参加者	80名

修了証書交付者 60名

2 現職者研修

ア 会場 大阪外国語大学

イ 日時 昭和49年8月20日(火)
～8月24日(土)

ウ 内容 (講義題目・講師)

世界の文字 西田龍雄

日本語の表記 池上禎造

仮名づかい・送りかな

浜田 敦

漢字・漢語 森岡健二

仮名とローマ字 玉村文郎

東西の言語生活 野元菊雄

東西の比喩・象徴の表現

八木 浩

待遇表現 宮地 裕

外国人学生について

—学生の心理— 氏原 寛

作文指導 佐治圭三

日西比較表現論 大倉美和子

翻訳論 春名万紀子

日朝比較表現論 塚本 勲

自由討論 玉村文郎

寺村秀夫

総括討論 佐治圭三

テスト 倉谷直臣

生森将人

懇談会 寺村秀夫

吉田弥寿夫

エ 参加状況

申込者 61名

参加者 53名

修了証書交付者 31名

III 日本語教育モデル教材の作成

1. 教材映画作成

ア 制作趣旨

日本語教育用補助教材としての徹底を期し、入門期の基礎的な教育内容について、1巻を5分ものとして3巻を制作した。これは、授業の発展・展開の契機となり、練習の模範となるものとして、授業開始時の導入用に、あるいは、終了時の復習用に使用することができ、また、指導の間に反復使用することもできるようにしたものである。

なお、この作成については、日本語教育映画等企画委員会を設け、木村宗男、池尾スミ、石田敏子、今田滋子、川瀬生郎、斎藤修一の諸氏を委員に委嘱して、主題、シナリオ等の決定、制作の指導等に協力を得た。

イ 規格・制作

規格 16ミリ カラー トーキー 1巻 5分 計3巻

企画 文化庁・国立国語研究所

制作 日本シネセル株式会社

ウ 題名

第1巻「これはかえるです」

（「こそあど」＋「はーです」）

第2巻「さいふはどこにありますか」

（「こそあど」＋「がーある」）

第3巻「やすすくないです たかいです」

（「形容詞とその活用導入」）

2. 刊行物

国語シリーズ別冊3「日本語と日本語教育——発音表現編——」を文化庁との共編で大蔵省印刷局から刊行した。なお、本年度中に、国語シリーズ別冊4「日本語と日本語教育——表現・文字編——」の編集をほぼ終えた。

（武田）

図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和49年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図 書

受 入……………1,706冊

	購 入	寄 贈	製本雑誌	その他	計
和 書	742	213	413	68	1,426
洋 書	152	40	88	0	280
計	894	253	501	68	1,706

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入……………644種

	購 入	寄 贈	計
和	55*	532	587
洋	40	17	57
計	95	549	644

* 新聞（8種）を含む

（大塚）

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所在地	東京都北区西が丘3丁目9番14号		
敷地			10,030m ²
建物			
本館	鉄筋コンクリート二階建	(延)	1,576m ²
図書館	鉄筋コンクリート平屋建書庫積層	(延)	213m ²
	(旧)電子計算機室 鉄筋コンクリート平屋建		118m ²
その他附属建物		(延)	570m ²
研究棟	鉄筋コンクリート三階建	(延)	3,015m ²
研究室			872m ²
電子計算機室			339m ²
実験室			384m ²
機械室			96m ²
その他附属建物			1,324m ²
計			5,492m ²

2 経費

昭和49年度予算額

人件費	225,570,000円
事業費	109,320,000円
各所修繕	654,000円

昭和49年度文部省科学研究費補助金総額

総合研究費(A)	2,800,000円
一般研究費(B)	3,000,000円

一般研究費（C）

1,100,000円

II 評議員会（昭和50年3月31日現在）

会長 有光 次郎 （昭和50年3月13日就任）	副会長 佐伯 梅友 （昭和50年3月13日就任）
石井 庄司	石井 良助
岩村 忍	江尻 進
遠藤 嘉基	小川 芳男
小野 吉郎	何 初彦
坂井 利之	沢田 慶輔
田中千禾夫	千葉雄次郎
徳永 康元	中村 光夫
西尾 実	久松 潜一
福島慎太郎	頼 惟勤

III 組織と職員

1 定員 75名

2 組織および職員（昭和50年3月31日現在）

昭和49年4月11日から国立国語研究所組織規程が下記のとおり改正，実施され，同時に日本語教育部が発足した。

	職名	氏名	備考
国立国語研究所	所長	岩淵悦太郎	50.2.26～50.3.7 日本語教育部長
庶務部	部長	荻原 滉	事務代理
庶務課	課長	酒井 睦夫	49.4.1 奈良女子大学に転出
	課長	中満 知生	49.4.1 九州芸術工科大学から転入
	課長補佐	国井 和朗	
		菊地 貞	
		岡本 まち	

			荒川佐代子	
	併任		田島 正幸	
会 計 課	課 長	幸 文雄		49. 4. 1 東京国立文化財研究所に転出
	課 長	渡部 新一		49. 4. 1 文化庁から転入
	課長補佐	山本 昌志		
		金田 とよ		
	非 常 勤	小原ちい子		(49. 4. 1～50. 3. 30まで)
	"	中山 典子		(49. 5. 21～50. 3. 30まで)
		山本 光夫		49. 7. 1 文化庁から転入
		岩田 茂男		
		南 弘一		49. 7. 1 筑波大学に転出
		中村 佐仲		
		加藤 雅子		
		木村 権治		
		鈴木 亨		
		安藤信太郎		
		浅香 忠雄		
図 書 館		大浪由紀夫		49. 6. 16 東京学芸大学に転出
		大塚 通子		
		塚田 吉彦		49. 12. 1 採用
言語体系研究部	部 長	西尾 寅弥		
第一研究室	室 長	高橋 太郎		
		工藤 浩		49. 4. 20 採用
		鈴木美都代		
第二研究室	室 長	宮島 達夫		
		村木新次郎		49. 9. 1～50. 8. 31 外国出張 (西ドイツ)
		高木 翠		
言語行動研究部	部 長	野元 菊雄		49. 8. 16～50. 3. 31 言語行動研究部第一研究室長 事務代理
				49. 4. 11～51. 3. 31 言語行動研究部第三研究室長 事務取扱
第一研究室	室 長	本堂 寛		49. 8. 16 岩手大学に転出

		中村 明	
		江川 清	
		林 実知代	
第二研究室	室 長	渡辺 友左	
		角田 令子	49.12.31 退職
第三研究室		上村 幸雄	49.4.1~51.3.31 外国出張 (西ドイツ)
		高田 正治	
		神部 尚武	
言語変化研究部	部 長	飯豊 毅一	49.8.2~49.8.21 言語変化研究部 第一研究室長 事務代理
第一研究室	室 長	徳川 宗賢	49.8.2~49.8.21 私事渡航 (英, 仏, 伊, 独, スイス, オーストリー)
		佐藤 亮一	
		白沢 宏枝	
	非常勤	W.A.グロ ーターズ	(49.4.15~49.5.13)
第二研究室	室 長	飛田 良文	
		梶原滉太郎	
		中山 典子	
		堀江よし子	
		田原 圭子	
		伊藤 菊子	
		中曽根 仁	
言語教育研究部	部 長	芦沢 節	49.8.10~49.10.8 言語教育研究部 第一研究室長 事務代理
第一研究室	室 長	村石 昭三	49.8.10~49.10.8 外国出張 (在外研究 員) (西ドイツ, フランス, アメリカ)
		大久保 愛	
		岩田 純一	
		川又瑠璃子	
言語計量研究部	部 長	斎賀 秀夫	49.4.11~50.6.30 言語計量研究部 第一研究室長 事務取扱
第一研究室		田中 章夫	48.7.1~50.6.30 外国出張 (オーストラリア)
		中野 洋	
		齋岡 昭夫	

第二研究室	室長	岡田 敏子	
		土屋 信一	
		野村 雅昭	
		田島 道子	(旧姓 武田)
		白木 千夏	
第三研究室	室長	石綿 敏雄	
		齋藤 秀紀	
		米田 正人	
		堀江久美子	
		竹内 純子	
		小高 京子	
		沢村都喜江	
		下山いくよ	49.6.15 退職
日本語教育部	部長	林 大	49.4.11 文部省から転入 50.2.26~50.3.7 外国出張(中国)
		水谷 修	49.4.11 アメリカ・カナダ12大学連合 日本研究センターから採用
日本語教育研究室	室長	高田 誠	49.4.11 言語変化研究部 第一研究室 より配置換
		日向 茂男	50.2.3~50.3.13
日本語教育研修室	非常勤	武田 祈	49.4.11 文化庁から転入
		田島 正幸	49.7.1 庶務部庶務課より配置換
	併任	中本 純晴	(49.4.16~50.3.31)
		非常勤	山本 妙子

IV 外国人研究員および内地留学生の受入れ

I 外国人研究員

氏名・職名	研究題目	研究期間
ロルフ・リングレン ストックホルム大学生 (スウェーデン)	言語生活に関する研究	昭和48年10月1日から 昭和49年9月30日まで
ミュウラー・ヨコタ ルール大学教授 (西ドイツ)	日本語文法の研究	昭和49年7月15日から 昭和49年10月15日まで

スタファン・ヤンソン ストックホルム大学生 (スウェーデン)	電子計算機による日本語文型の 研究	昭和48年10月1日から 昭和49年9月30日まで
ロバート・スークル コーネル大学言語学研究生 (アメリカ)	日本における Syntactic Forms の種類の発生を支配する社会言 語学的特徴および英語との対照 についての資料収集と分析	昭和49年9月から 昭和50年8月まで

II 内地留学生

氏名	勤務職名	研究題目	研究期間
羽坂 誠次	徳島県阿南市大野小学校 教諭	国語科学習指導法の研 究 国語科授業のシステ ム 化	昭和49年10月1日から 昭和50年3月25日まで
福井 真雄	名古屋市丸の内中学校 教諭	読書生活に生きる読書 指導	昭和49年8月3日から 昭和49年9月27日まで
樋口 俊雄	名古屋市立豊臣小学校 教諭	感動の喜びをふくらま せる読書指導	昭和49年10月5日から 昭和49年11月29日まで
服部 侑史	名古屋市立老松小学校 教諭	説明的文章の確かな読 みとりの指導	昭和49年10月5日から 昭和49年11月29日まで
福島 尚彦	オーストラリア スイ ンパン工科大学 日本語講師	アジア諸国言語文化教 育振興のための、日本 語副教材の作成に關す る研究並びに資料収集	昭和50年1月1日から 昭和50年12月31日まで

V 日 記 抄

1974. 4. 11 国立国語研究所組織規程を全面改正し、同時に日本語教育部が発足した。
5. 30 文化庁附属機関庶務会計部課長会議（国立教育会館）
6. 5 研究棟落成式 文部大臣，文化庁長官その他関係者約140名が出席した。
- 6～7 第33回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（私学会館）
昭和49年度文部省所轄研究所長会議（京王プラザ，当番国研）
- 26 国立奈良文化財研究所長および文部省大臣官房官房長来訪
7. 15 日本語教育初心者研修（15～19）開催（国立教育会館）

1974. 7. 25 第84回国立国語研究所評議員会（国立国語研究所会議室）
8. 20 日本語教育初心者および現職者研修（20～24）開催（大阪外大，中小企業会館）
- 28 パリ大学教授ユベール・マエス氏来訪
9. 2 文部省国際學術課崎谷氏およびカリホルニア大学ハンスH. ベアワルド氏来訪
- 17 深谷市教育委員会指導主事 石川修三氏ほか9名来訪
10. 2 西独ボン大学東洋語学研究所日本語科フランス・コイラス氏来訪
- 22～24 第25回文部省所轄機関事務協議会（国立能登青年の家，当番国研）
- 28～29 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第3部会（京都大学）
11. 7～8 昭和49年度第25回文部省所管研究所第3部会事務協議会（城の崎）
- 8 東京外語大日本語科生 湯本昭南氏ほか9名来訪
- 27～28 文部省所轄研究所長会議（国立特殊教育研究所）
12. 13 第85回国立国語研究所評議員会（如水会館）
- 20 創立記念行事 記念講演・講師 岩村 忍氏（国研会議室）
1975. 1. 4 スーダン国 ヘルマン・ベル氏来訪
- 25 韓国弘益大学校助教授 崔 康賢氏ほか3名来訪
2. 24 文部省所轄研究所事務協議会（国文学資料館）
3. 8 各地方言資料の収集および文字化のための研究打ち合せ会（国語研究所会議室）
- 10 各省直轄研究所長連絡協議会（農林年金会館）
- 11 文化庁附属機関長会議（文部省）
- 13 第86回国立国語研究所評議員会（如水会館）
- 14～28 文化協定締結国費等からの学者招致者 エリノア・H. ショルダン
コーネル大学言語学教授受入れ
- 18 文化庁附属機関会計部課長会議（奈良博物館）

昭和50年9月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3-9-14
電話東京(900)3111(代表)

UDC 058 : 809.56

NDC 810.5

本書の市販品発行所

東京都新宿区納戸町40(260)5281

株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	〃	700円
4	婦人雑誌の用語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	〃	品切れ
6	少年と新聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	180円
7	入門期の言語能力	〃	品切れ
8	談話語の実態	〃	〃
9	読みの実験的研究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語 (前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総合雑誌の用語 (後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中学生の読み書き能力	〃	400円
15	明治初期の新聞の用語	〃	品切れ
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	〃
18	話しことばの文型 (1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総合雑誌の用字	〃	品切れ
20	同音語の研究	〃	〃
21	現代雑誌九十種の用語用字 (1) ——総記および語彙表——	〃	1,000円
22	現代雑誌九十種の用語用字 (2) ——漢字表——	〃	1,000円

23	話しことばの文型(2) ——独話資料による研究——	秀英出版刊	品切れ
24	横組みの字形に関する研究	〃	〃
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) ——分析——	〃	1,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	〃	750円
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1	日本語地図(1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日本語地図(2)	〃	〃
30-3	日本語地図(3)	〃	〃
30-4	日本語地図(4)	〃	8,000円
30-5	日本語地図(5)	〃	9,000円
30-6	日本語地図(6)	〃	10,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究(Ⅱ) ——新聞の用語用字調査の処理組織——	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	〃	700円
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 ——松江24時間調査資料から——	〃	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	秀英出版刊	3,000円

45	幼 児 の 読 み 書 き 能 力	東京書籍刊	4,500円
46	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (IV)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観——	”	700円
48	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (IV)	”	3,000円
49	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (V)	”	900円
50	幼 児 の 文 構 造 の 発 達 ——3歳～6歳児の場合——	”	品切れ
51	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VI)	”	1,000円
52	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——福岡における20年前との比較——	”	1,800円
53	言 語 使 用 の 変 遷 (1) ——福島県北部地域の面接調査——	”	2,500円
54	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VII)	”	1,000円
55	幼 児 語 の 形 態 論 的 な 分 析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	”	1,300円

国立国語研究所資料集

1	国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例——	”	品切れ
3	送 り 仮 名 法 資 料 集	”	”
4	明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目	秀英出版刊	”
5	沖 繩 語 辞 典	大蔵省印刷局刊	3,500円
6	分 類 語 彙 表	秀英出版刊	1,600円
7	動 詞 ・ 形 容 詞 問 題 語 用 例 集	”	1,700円
8	現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中間報告)	”	500円
9	牛 鹿 羅 漢 安 愚 楽 鍋 用 語 索 引	”	1,500円

国立国語研究所論集

1	こ と ば の 研 究	秀英出版刊	品切れ
2	こ と ば の 研 究 第 2 集	”	750円
3	こ と ば の 研 究 第 3 集	”	品切れ
4	こ と ば の 研 究 第 4 集	”	1,300円
5	こ と ば の 研 究 第 5 集	”	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和 24 年度	品切れ	14	昭和 37 年度	220円
2	昭和 25 年度	〃	15	昭和 38 年度	250円
3	昭和 26 年度	160円	16	昭和 39 年度	品切れ
4	昭和 27 年度	160円	17	昭和 40 年度	250円
5	昭和 28 年度	品切れ	18	昭和 41 年度	300円
6	昭和 29 年度	200円	19	昭和 42 年度	300円
7	昭和 30 年度	品切れ	20	昭和 43 年度	品切れ
8	昭和 31 年度	〃	21	昭和 44 年度	〃
9	昭和 32 年度	〃	22	昭和 45 年度	400円
10	昭和 33 年度	〃	23	昭和 46 年度	450円
11	昭和 34 年度	〃	24	昭和 47 年度	450円
12	昭和 35 年度	350円	25	昭和 48 年度	500円
13	昭和 36 年度	160円	26	昭和 49 年度	

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和 29 年版	品切れ	昭和 40 年版	1,100円
昭和 30 年版	〃	昭和 41 年版	1,100円
昭和 31 年版	〃	昭和 42 年版	1,100円
昭和 32 年版	〃	昭和 43 年版	品切れ
昭和 33 年版	〃	昭和 44 年版	1,500円
昭和 34 年版	〃	昭和 45 年版	1,500円
昭和 35 年版	〃	昭和 46 年版	2,000円
昭和 36 年版	800円	昭和 47 年版	2,200円
昭和 37 年版	品切れ	昭和 48 年版	2,700円
昭和 38 年版	〃	昭和 49 年版	3,800円
昭和 39 年版	980円	昭和 50 年版	3,800円

日本語教育教材

1 日本語と日本語教育 国立国語研究所・文化庁共編 大蔵省印刷 650円

高 校 生 と 新 聞 国立国語研究所共編 日本新聞協会 秀英出版刊 280円

青年とマス・コミュニケーション 日本新聞協会共著 国立国語研究所 金沢書店刊 品切れ

1974—1975
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1974 to March 1975

The Descriptive Study of Modern Japanese Grammar

The Study of Vocabulary

Comparative Study on the Variations of Language Behavior Between
Various Social Groups

A Stylistic Study of Figurative Expressions

Linguistic Sociological Study on the Kinship Vocabulary of Japanese
Dialects

Study on the Physiological Process of Pronunciation

Information Processing in Visual Pattern Perception and Reading

On Checking the Linguistic Atlas of Japan

On the Taping and Transcription of Japanese Dialects

Basic Study on the Relation Between Language and Social Structure
Research on the Borrowing of Chinese Words in the Early Meiji
Period

Study on the Relation Between Acquisition of Word Meaning and
Cognitive Development in Children

Research on the Language Ability of Elementary and Middle School
Students

The Analytic Study of Language Data by Computer

The Lexical Study on Works by Sôseki and Ôgai

Study on the Writing System of Modern Japanese

Statistical Investigation of High School Textbook Vocabulary

Fundamental Studies on the Content and Method of Teaching
Japanese as a Foreign Language

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO